G海軍航空隊

タゴサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｇ海軍航空隊

【Ｎコード】
Ｎ９３０３Ｙ

【作者名】
タゴサク

【あらすじ】
オレは・・。
確か死んだハズでは？
オレは田中実と言う人間だった。
何故・・Ｇになってるのだ？

追記
このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

オレはGだ。（前書き）

オレは・・。
確か死んだハズでは?
オレは田中実と言う人間だった。
何故・・G田になってるのだ?

オレはGだ。

オレは・・。

確か死んだハズでは？

オレは田中実と言う人間だった。
趣味は戦記モノを読む事。
最近は減ったが異世界乱入モノも大好きだった。
そんなオレが仕事帰りに一杯飲って、フラフラと歩いてたら・・・。

目の前にダンプが・・・・・・。

「アッ、オレ、オワタ・・。」

そう思って当然だろう。
身体に強い衝撃を感じたのが田中実としての最後だったろう。
そのオレがどうして・・。

「G田、総員起こしだぞ。タラタラしてたら指導教官に殴られるぞ。」

G田実となってたのだ。

ここは広島の田舎にある海軍兵学校。
オレはその中の海兵５２期生徒として、ここに在籍してる。
時は１９２５年。
同期の柴田武雄も今は仲が良い。今は・・だがな。
未来では彼とオレは対立してしまうのだ。
このG田と言う男は某４３航空隊を指揮したり派手な経歴ばかり目立つが、

実態は「航空素人」だ。

少なくともオレはそう思ってる。

あの零戦が最後までコキ使われる原因となったのも、
コイツみたいな無能が中枢を占めてたからだ。

零戦の設計時にも散々な事をしてくれ、
おかげで大戦末期には特攻爆弾となってしまったのもコイツが悪い。

少なくともオレはそう思ってる。

大体未来の航空機がマッハとなるのも想像出来ない人間だもんな。

余談だが、戦時中最高の艦載機はオレはグラマンＦ４Ｆだと考えてる。
小さい飛行機だが凡庸性も高く、簡易空母でも運用可能。
そしてコンパクトに畳めるあの翼。
アレがあれば・・・・。
急増空母でも簡単に運用出来、対潜哨戒でも大活躍しただろう。

さて、もうすぐ我々はこの兵学校を卒業し、遠洋航海に出る事になってる。
後年、柴田と揉めないためにも彼とは親友になっておかないとな。
何せ数々のエースが彼を信頼してたのは有名な話だ。
Ｇ田は某４３航空隊のみだし・・。

「柴田、オレはこの航海が終わったら航空の道へ進もうと考えてるのだ。」

「Ｇ田、お前もか？
オレも航空隊に入るつもりだ。」

「オレは戦闘機部隊に入りたいと思う。
未来は絶対に戦闘機が軍隊の先端となるからな。」

「どうしてだ？」

「考えても見ろ。
今の飛行機は誕生して二十年も経っていないのに、既に戦争兵器として大活躍してる。
特に戦闘機の性能向上は予想も出来ない程だ。
今はグルグル回るだけの格闘戦ばかりしてるが、

将来は爆撃機も偵察もすべて一機種で賄える日が来る。
オレはそう確信してる。
そのためには戦闘機を今のウチに手に入れ、海軍の中枢に育てるべきだと思うのだ。」

「フム・・。凄い考えだが・・。
確かに飛行機の性能向上は凄いと思う。
フワフワと飛ぶだけだった飛行機が、
ここまで性能が上がるとはライト兄弟も予想してなかったろう。
先の大戦では完全に戦争の末路も決めたしな。」

「それにだ。
今は馬力が無くて頼りないかも知れぬが、
戦闘機のパワーが上がれば手の届かない超高空にも駆け上がれる。
速度も上がる。
パワーがあれば出来ない事は無くなるぞ。
パワーがあれば燃料も多く搭載出来るから、航続距離も伸ばせる。
そして、爆撃にも重い爆弾を抱えられる。
戦闘機だから爆弾を捨てたら敵機にも歯向かえれる。
爆撃機では出来ない芸当だぞ。
これなら護衛ナシでも敵陣深く侵入可能になると思わないか?」

「凄い。
確かに馬力が上がれば重い爆弾も抱えられるし、高い空も飛べる。
何よりも速度も上がるな。」

「柴田、オレと一緒に航空隊の未来を開発しようぜ。」

「G田、オレも戦闘機に乗るぞ。」

若い彼等が熱い話をしてるのを影から高野五十六が覗いてたのを彼等は知らない。

「フフフフ。素晴らしい話だ。
確かに馬力が上がればあの頼りない飛行機も活用可能となるな・・。
帰国したら彼等を早速航空の道へ引き入れないと・・。」

G田となった田中は柴田との交遊の道を得て、
未来の険悪な関係とは途絶する事になった。

（ヨッシャ！！
これで坂井センセや未来の部下から顰蹙買わずに済むぞ。
零戦も絶対に馬力中心で活用させないとな。
オレの持つ未来の戦闘機のデザインも各航空機会社に渡さないと・・！）

G田実となった田中実は心で未来の海軍航空隊を画いてた。

オレはGだ。（後書き）

本作の主人公は後年、嫌われたりルメイを表彰したりG田艦隊と陰口を
叩かれたアノ人ではありません。

多分・・。

後年、某エースから嫌われたり、
戦闘機無用論を提唱した人物とは一切関わりはありません。

多分・・・。

なをこの作品は完全に趣味に走りますので、実在の兵器や歴史とは全くリンクしません。
山本五十六も高野五十六として旧姓で出します。

追記
このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。
実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

今日も飛ぶ飛ぶぅぅ。（前書き）

いよいよ霞ヶ浦です。

今日も飛ぶ飛ぶぅぅ。

命惜しまぬ予科練のぉぉ、ななつボタンは桜に錨。
今日も飛ぶ飛ぶぅぅぅ・・。

やぁ、オレはG田となった元、太田実だ。

ようやく遠洋航海も終わり、士官パイロット候補生として霞ヶ浦に来てた。
時は１９２７年（昭和二年）。

柴田と共に、いよいよ俺達は霞ヶ浦で航空実習を受ける事になった。
余談だが、兵学校出身の教官と兵上がりの下士官では呼び方が違うのだ。
士官は教官、下士官だと助教と言う具合にな。
テクニックは間違いなく下士官が良いのに何故??
オレが海軍を仕切れる立場になったら、絶対にこの制度は変える。
学校を出たばかりのオレ達みたいなボンボンが
歴戦のパイロットを率いるなんて冗談では無い。

「柴田、今のパイロットの育成制度をどう思う?」

「ン??どうって??」

「おかしいと思わないか?
まだ素人のオレ達が分隊士とか呼ばれ、歴戦のパイロットである下

士官搭乗員を
アゴでコキ使ってる状況だよ。」

「確かにな。
オレ達みたいな素人が歴戦のパイロットを使えるのもおかしい。
どうなってるのだ??」

「恐らく古くからの悪いしきたりが今も続いてるのだろう。
特にパイロットでは絶対に修正すべき制度だ。」

「そうだな。歴戦のパイロットをムダに死なすかも知れないしな。」

「ウム。そのためにもオレ達だけでも彼等の信頼を得ておくべきだ。」

「ああ、未来の部下でもあるしね。」

士官待機室でオレ達は話し合ってたが、オレ達の話を他の士官は全く聞いていなかった。
そして三式初歩練習機の前部シートに座り、後席の助教の下士官パイロットから指導を受けてた。

「G田少尉、宜しくお願いします。
黒岩一空曹と申します。」

古参パイロットの黒岩紀雄がオレの指導教官だった。

「黒岩一空曹、G田少尉です。宜しくご指導お願いします。」

「し、少尉・・。私如きに丁寧な挨拶なと不要ですよ。」

「とんでもない事です。
空を飛ぶ事に関しては私はド素人。
プロの貴方に教わるのですから、キチンと挨拶だけでもしておくのは当然でしょう。」

黒岩はビックリしてた。
大半の・・と言うか、
士官候補生の連中は下士官には呼び捨てで、どこのバカ殿かよ?と言いたくなる連中ばかり。
逆らっても彼等の方が階級も上。
間違っても彼等を批判すれば昇任も阻害されてしまうのである。
飛行時間が既に二千時間を越えてる黒岩にしても同じであった。
それなのにこのG田と言う少尉は・・・。
下士官の自分にキチンと挨拶やお礼を言う。
コレが兵士なら当然なのだが、仮にも士官だ。
未熟でも士官。
その士官から挨拶を受けるとは・・。
黒岩は感動してた。

「G田少尉、ありがとうございます。この黒岩、G田少尉のためにも誠心誠意を持ち、
持てる技術はすべてお伝え致します。」

「黒岩一空曹、宜しくお願いします。
それと訓練が終わった後で構いません。
滑走路脇で助教の皆様を集めて頂けませんか?」

黒岩はそら来たと思った。
我々を修正する気だろう。

だが来いと言われたら例え親の葬式でも集まらないといけないのが軍隊だ。

「分かりました。１７００以後なら大丈夫です。
全助教を集めておきます。」

「緊張しなくても大丈夫ですよ。
親交を深めたいだけですので。それと色々と飛行機について教わりたいと思ってるのです。
酒補や隊内だと色々と言われると思いましたので。」

修正（バッターやアゴ）を覚悟してた黒岩だったが、G田の話にはビックリさせられてた。
親睦を深めたいだけ??
今までの士官候補生だと、我々を見かけたらバカにするか、殴るだけ。
それが・・。

「G田少尉、全パイロット（下士官兵）を集めておきます。
我々の持てる知識や技術はすべて話します。
宜しくお願いします。」

「コチラこそ・・。
そろそろ発進しないと・・。」

「オッ、後がつかえてますね。では、富士山、筑波山八の字飛行発進。
私が最初は操縦しますので、手足は離してくださ。」

「了解です。黒岩一空曹。」

やがて三式初歩練習機はスルスルと滑走を始め、フワリと霞ヶ浦の空に舞い上がった。

（柴田も同じ事を頼んでるだろうな・・・。）

G田は僅かずつでも下士官兵と交流を持ち、
彼等の親交を得て後の海軍航空隊の要とするつもりだったのだ。
パイロットの大半は下士官なのだからな。

G田と柴田は共に下士官との交流を持ち、一日でも早く技術の習得。
そして海軍航空隊の発展を進捗するのだ。

今日も飛ぶ飛ぶぅぅ。（後書き）

ようやく霞ヶ浦です。

追記

このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

霞ヶ浦（前書き）

まだ訓練途上です。

霞ヶ浦

もう田中です・・とは言わなくても良いでしょう。
G田です。
現在、霞ヶ浦の滑走路外柵近辺で下士官との親交を深めております。
いや、歴戦の搭乗員の方の目って恐いですね。
階級と言う傘が無かったらとても対等には話せないと思います。

「皆さん、こんばんわ。
今度、この霞ヶ浦で初歩訓練を受ける事になりました、G田少尉です。
コチラは同期の柴田武雄少尉です。宜しくお願いします。」

「柴田少尉です。空を飛ぶ事に関しては皆様に教わるしか無い人間です。
宜しくお願いします。
それと・・。
コレはホンのお近づきの印です。良かったら皆さんで分けてください。」

オレと柴田は持参した袋を彼等に手渡した。
中身は高級タバコのホマレだ。
酒でも持ち込もうと思ったが、まだ巡検前。
休みならともかく平日にはマズイと思い、タバコを二人で金を出し合い、彼等に
プレゼントしたのだ。

ワイロとは違うからね。

「G田少尉、柴田少尉、頂いても宜しいのですか？
こんな高級タバコを？？」

「モチロンです。皆様に今後は指導して貰うのですから。」

そう言うと彼等はワイワイ言いながらホマレを分け合いスパスパと吸い始めた。

そして黒岩一空曹が先陣を切り我々に挨拶を始めた。

「G田少尉、柴田少尉。先任搭乗員を勤めております黒岩です。
お二人の指導は我々が責任を持ち、初歩からキチンと指導致します。
」

「黒岩さん、宜しく頼みます。他の皆様も訓練では遠慮無くシゴいてください。
さすがに外部の目がありますので、飛行中のみにお願いしますけど。
」

そう言うと彼等はワハハハハと笑い、「承知しました。」と応えてくれた。
そして彼等の実戦の話なども聞くと・・。
まだ、大戦に出たパイロットは数が殆ど居なく、唯一、上海方面で独逸と戦ったのが、
黒岩だそうだ。
ドイツのアルバトロスは中々手強かったとか・・。

「フム・・。やはり実際に戦った方の話は違いますね。
所で皆様にお聞きしたいのですが、将来の我が海軍航空隊には、今のパイロット育成制度で

間に合うと思いますか？」

彼等はガヤガヤと話し合ってたが・・。

「G田少尉、コレは内密（オフレコ）でお願い出来るなら話しますが。」

黒岩が代表で自分に話しかけて来たのだ。

「モチロンです。オレと柴田だけの心にとどめておきます。」

「それならお話します。
自分は先の大戦で撃墜したドイツのパイロットと話し合いをした経験があります。」

「ほお、興味深いですね・・。」

「ハイ。現在、世界の戦闘機はドイツ、アメリカ、イギリス、フランスがトップクラスです。
特にドイツは敗れたとは言え、素晴らしい新鋭機を続々と出しました。
東洋では殆ど戦果も無かったドイツですが、欧州では凄い活躍をしています。
特に赤男爵（レッドバロン）と呼ばれた英雄も出てますからね。」

赤男爵（レッドバロン）＞某二輪屋ではありません。＞は本名、リヒトフォーヘンと呼ばれる先の大戦最大の英雄だ。
８０機以上の撃墜数を誇るエースと呼ばれる英雄だった。
残念な事に大戦末期に戦死してしまったが。

「その彼等と色々と会話して分かったのですが、ドイツでは敗戦さ

え無かったら、
次の世代の戦闘機の開発も出来てただろうとの事です。」

「次の世代の戦闘機??」

「ハイ。翼は低翼単翼。ひたすらパワーを求め高い空を飛べる戦闘爆撃機と呼ばれる機種を開発してたらしいです。」

「興味深い話ですね。」

「そんな飛行機で戦闘任務が出来るのか?と聞くと、彼等はパワーさえあれば可能と断言していました。今の戦闘形態は二十年以内には滅びると予言もしてました。
ドッグファイトばかり求めてては貴重なパイロットの命がいくつあっても足りないとも。」

フム・・。
オレの計画とも一致する予言だな。
まさかドイツにもオレみたいな転生者が居るのか?
いや、居ると思う方が良い。
何事も想定しておかないと某原発騒ぎみたいな事態が起きたらフリーズしてまうぞ。
特にオレ達は軍隊だ。
常に最悪の事態を想定しておくべき。
備えあれば憂いナシと言うでは無いか。

その後彼等と色々と懇談し、今すぐは不可能だが、出来る限り下士官の優れたパイロットの

昇進を早める制度を上層部に具申すると約束した。
こんな凄腕パイロットが居るのに、素人士官に一番機を任せてた海軍・・。
いや・・。

日本軍は頭が狂ってたとしか表現が出来ないぞ。
絶対に腕＝階級にしないとね。
腕のあるパイロットが指揮したら、負け戦でも退却が可能となる。
勝てる戦も確実性が増す。
そのためにもオレ達が努力して、彼等を昇進させないとね。

その後、滑走路脇での懇談会はオレ達二人が修業するまで続けられた。
そして彼等とは部隊が違っても話し合う機会を持ててた。
何とか一日でも早く具申できる階級にならないとね。

霞ヶ浦（後書き）

G田とは違う生き様となるG田です。
下士官パイロット軽視は日本海軍最大の愚行でした。

追記
このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。
実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

G、ブチ撒けてまう。（前書き）

いよいよ航空参謀としてGが暗躍を始めます。

G、ブチ撒けてまう。

オッス。

オレはGだぜ。

所でどうしてGと呼んでるか分かるかい？

この世の全女性が大嫌いなGと言う黒光りするアレを連想させるからだよ。

その位、現実のGは大嫌いなんだーーい。

まぁ、それは置いて置いて・・・。

霞ヶ浦の練習機過程を終えたオレと柴田、淵田は共に戦闘機要員として横須賀に来てた。

時は昭和三年、まだまだ複葉機全盛は続いてた。

下士官なら佐伯とか大村なんだろうが、この頃は横須賀で戦闘機過程を練習させてたのだ。

（実際の歴史とは全然違います。）

何故、パールハーバー攻撃隊の指揮官となる淵田が戦闘機要員に居るかって？

口説いたからだよ。

未来は絶対に戦闘機が海軍のトップに来るからとね。

そのためにも有望な指揮官は近くに居て貰わないと・・。

「G田、いよいよオレ達も指揮官としての道を歩くんだな。」

「淵田、オレ達は指揮官としてでは無く、参謀として戦闘機隊を指揮するのが目標だ。
ヘタクソなオレ達が空を飛んでも飛行機を壊して減らすだけだろうが。」

「ワハハハ。違い無い。
オレ達の仕事は下士官パイロットをいかに育てるか?だな。」

「ウン。それと戦闘機の開発だ。
とにかく一日でも早く参謀への道を見つけ、海軍航空隊を育てよう。」

「G田、高野司令がオレ達を呼んでるぞ・・。」

「お前、司令に何かしたか?」

「イヤ・・。そもそも司令とは縁も所縁も無いぞ。」

高野司令とは別世界では山本五十六となったアノ人の事だ。
この世界では養子に入らず、高野のままらしい。
日本海海戦でも負傷しなかったらしく、指も五本揃っています。ハイ。

「G田中尉、以下二名、入ります。」

「ウム、入れ・・・。」

「「失礼しまぁぁす。」」

「初めて会うが、私が横須賀航空隊司令、高野五十六だ。
G田くん、柴田くん、淵田くん。まあ座りたまえ。」

司令の指示により、オレ達は椅子に座らせてもらった。

「時にG田クン。キミは霞ヶ浦では中々の好成績を収めてたらしいな。」

「いえ、助教の指導が素晴らしかっただけですよ。
彼等の指導でココまで来れました。」

「フム・・。時に君達とは会うのは実は二度目なのだよ。」

「と、言いますと?」

「君達とは遠洋航海でも同じ艦に乗ってたのだ。私は。」

「そうでしたか・・。」

「まっ、茶飲み話に付き合わせるために君達を呼んだのでは無いから安心したまえ。」

「ハイ。了解しました。」

「あの航海の時、そこに居る柴田クンとキミは面白い話をしてたね?」

ヤバ・・。聞かれてたか・・。

「は、ハイ。」

「未来は戦闘機が中心となるともね。」

「ハイ。その通りです。
現代の戦闘機を見てたら信じられないとは思いますが、馬力さえ上がれば、
殆どの航空戦闘は戦闘機だけで行える時代が来ると私は確信しています。」

どうせ併行世界だ。
思った事をブチ撒けてしまえぇぇぇ。

「どうしてそう思うのだ?」

「所で高野司令、貴方は山本家に養子の話が来た事は無かったですか?」

「何故・・。その事を他人のキミが??」

高野は動揺してた。
今まで突っ込まれて慌てた彼から我が家の事情を逆に質問されたから。。

「柴田、淵田、今から途方も無い話をするが発狂してるとは思わないでくれ。」

「お前の話を信じない訳が無いだろう。例え月が落ちて来るとか言

われても、
オレはお前を信じる。」

「オレもだ、G田。」

「ありがとう。柴田、淵田。高野司令、これからの話は内密(オフレコ)でお願いします。」

「フム・・。良いだろう。それにしてもキミ達は仲が良いのだね。同期と言えば競争相手でもあるだろうに。」

「未来の海軍航空隊の要となるのが我々三人ですから。仲違いするのは勿体無い事です。」

「そりゃまた大きく出たモンだね。どうしてそう思うのだ?」

「司令、絶対に信じられないとは思うでしょうが、私は約八十年後の未来から生まれ変わった男です。名は田中実と言います。住居は横須賀市〇〇町〇〇番地。生年月日は昭和五十六年八月十五日です。そして逝年、平成二十年。九月十日です。」

「八十年後の未来から生まれ変わった男だと?しかも・・平成とは?」

「現人神であらせられる現天皇陛下様がお隠れになった後、現皇太子であらせられる明仁親王様の時代の称号です。西暦ですと１９８９年です。」

「フム・・。と言う事は現天皇陛下様はかなり長くご在位されるのだな？」

「ハイ。歴代でもトップクラスの在位期間だったと思います。」

「で、どうしてそんな事を私達に告げる気になたのかね？」

「隠してても意味が無いと思ったからです。」

「どうしてか？」

「司令、今の海軍、陸軍の対立で国力が成長出来ると思いますか？」

「フム・・。確かに陸軍と海軍は仲違いし、予算の盗り合いばかりしてるね。」

「その通りです。私の知る世界では、１９４５年。つまり昭和二十年の八月１５日までその時代が続きます。」

「また具体的な日にちが出て来たね。その日は意味があるのか？」

「モチロンです。その日。日本帝國は滅びるのですから・・。」

「帝國が滅びる？？」

「ハイ。日本帝國は欧米連合軍と闘い、数の力に圧倒され日本は完全に廃墟となり敗戦します。

今のままでは確実に。」

高野は驚いてた。
まさかこんな途方も無い話が出て来るとは思わなかった。
単に面白い話をする部下から今後の戦闘機に付いて質問したいだけだったからだ。
しかし私の身内の事情まで知られてるとは・・。
信じるかどうかは別にしても、聞く価値はあるな・・。

「フム・・・。ではそのキミの知る話を聞かせてくれるか？
もちろん単純に信じる事は出来ないが。」

「モチロンです。狂人と思われても仕方ない話ですからね。
さて、この田中実が憑依してるG田実と言う男ですが、私の知る世界では・・。
柴田、お前とは徹底的に対立してたのだよ。」

「どう言う事だ？G田、いや・・田中・・か？」

「G田で良いよ。柴田、お前は十年後の未来では戦闘機部隊の指揮官として前線ばかり
渡り歩く事になってる。淵田は攻撃機隊指揮官だ。
そしてオレ、いやG田は・・。
空母航空隊参謀として働いてた。
空母部隊の指揮官となるある方が、航空機に無知だったため、G田の指示が一方的に通り、
後年はG田艦隊と呼ばれる程だった。
だがG田は無能では無いが愚かだったのだ。
戦闘機無用論とか提唱し、貴重な戦闘機搭乗員を削減したり、十二試艦上戦闘機開発に

ムチャな性能を求め発展性の無い戦闘機を作らせてしまってた。
柴田との対立は戦後も続き、G田が戦後の空軍となる航空自衛隊に入隊したら、
オレと同じ釜のメシは二度と喰いたく無いと断り、生涯操縦桿も握らなかった程だ。」

「フム・・。中々凄い話だね。G田君。
そろそろ定時となるが。話の腰を折りたく無い。
キミ達、今から時間は大丈夫かね?」

「「「モチロンです。司令。」」」

「では場所を変えて徹底的にG田君の話を聞く事にしよう。」

そう言うと司令は電話を取り、副官に我々の処遇を指示し我々は司令と一緒に航空隊近辺にある、
料亭へと向かう事になった。

G、ブチ撒けてまう。（後書き）

G君、ついにブチ撒けてしまいました。

追記

このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

エンジンの音ぉぉ（前書き）

いよいよGが動き始めます

エンジンの音ぉぉ

エンジンの音、轟轟とぉぉぉ。

オッス、Gだぜ。
もうGで良いだろ?

時は昭和四年。
後に名設計技師となる堀越二郎も俺達とほぼ同年代だったのだ。
少しビックラ・・。

さてオレは今、三菱の大幸工場に来てる。
星型空冷エンジンの工場だが、ここは後年ドラの本拠地となるのだ。
今は工場地帯だがな。

今回は未来のハイパワーエンジン開発を具申するために大幸に来てた。
パワーこそが命よ。
パワーがあれば飛行機は何でも出来る。
重い爆弾でも重武装でも。
そして大量のガソリンも積める。
重装甲も可能だ。

機体のデザインは既に伝えてあるので、後はエンジン・・だよね。
中島にも伝えたが、アチラには栄の詳細を話した。
中島知久平が食いついて来たのには大笑いしたぞ。

横須賀のアノ夜はとんでもなく熱い夜となった。
オレは柴田、淵田、そした高野司令と共に一夜を熱く語り合った。

高野司令は陸軍のボケ共から航空部隊を取り上げ、代わりに戦車部隊の充実を確約させると
言ってくれた。
海の上を飛べないパイロットなんて日本には不要だもんね。
日本は海に囲まれた国だ。
柴田と淵田はオレの発言に驚きはしたが、オレに付いて来てくれると言ってくれた。
本来のGだと、柴田とは徹底的に対立するのだが、今のGでは対立する理由も無い。
柴田もオレの意見に全面的に賛成してくれたから。
淵田も本来進むべき攻撃隊指揮官の道を蹴り、戦闘機隊参謀として働き始めてくれた。
オレは自分の持つ未来知識と未来の戦闘機、特にここ十年以内に登場する世界の主力戦闘機の
詳細をすべて彼等に公開すると約束した。
今は頭の中にしか無いので、まずは正確に図面にしないとね。
中々苦心したが、出来上がったすべての図面を高野司令に渡すと彼は・・。

「凄い。
今までは半信半疑だったが、コレを見たら信じる事も出来る。
Gクン。
キミを私付けの参謀として登用しよう。
他の諸君もだ。」

ヨッシャ、コレで参謀への道が開けたどぉぉ。
高野指令のお墨付きを貰えた俺達は戦闘機参謀の肩書きを付けて貰い、
分散して各地の航空隊、そして航空機製造会社を訪問。
今後の方針の指導に歩き始めた。

当初は彼等から「また甲板士官が庶民を苛めに来たぞ。」と、冷ややかな目で見られてたが、
今では彼等も私達を信頼してくれてる。
既に三菱、川崎、中島、川西は陸軍では無く海軍を信頼してくれてる。
おかげで陸軍の戦闘機の開発は頓挫し始めてた。
作る会社が無かったら、そりゃね・・。
ついでに言うけど自分は陸軍のパイロットの技術は否定してないよ。
特に加藤隊長なんて不世出の名指揮官と今でも思ってる。
ただ陸軍の参謀の大半がヴォケなのよ。
Gとタメ張りますね。

ウン。

本来のGはどうもオレがコチラに飛ばされたせいでオレの身体と入れ替わったみたいだ。
気づいたら棺桶なんてね。
恐らく神風特別攻撃隊の勇士の怨念だろう。
ザマーですよ。
ホホホホホ。
戦後も靖国にロクに参拝もせず、ルメイを表彰するわ、ロッキードから裏金を貰ってるわ。
多分ですけどね。
旧帝國海軍最大の裏切り者はGと元台南航空隊の飛行隊長のNだわ。
ヤツは鬼の西沢も殺したしね。
彼もゼロ戦を取り上げられなかったら絶対に死んで居ない人間だ。
Nのヤローが西沢の愛機を取り上げたせいで、彼は死んだ。
オレは絶対に名パイロットは大切にするどぉぉ。
そのためにも予科練の制度も今のウチに整備しておかないと。

オレは三菱に頼み込み、十年計画で、とにかくハイパワーエンジンの開発を頼んでた。

「お願いします。
海軍の未来はハイパワーエンジンの航空機にかかってるのです。
ムリは承知です。
失敗も繰り返すとは思いますが、何とか十年以内に二千馬力のエンジンの開発をお願いします。
もちろん最初は千馬力程度で構いません。
ですが、それをテストベッドにして、十八気筒化すれば・・。
絶対に二千馬力は達成出来るハズです。」

「G中尉、分かりました。
失敗を前提にして頂けるなら、
十年以内に二千馬力のエンジンの開発は可能だと思います。
ただ・・。」

「モチロン海軍は全面的に支援します。
ハイオクガスも五年以内には百オクタンを標準化する予定です。
そのための製油所も徳山に建築中です。
技術者も帝國大学から優先的に回します。」

「分かりました。それでは、早速取り掛かります。
進展したら即座に海軍航空本部に連絡します。」

「宜しくお願いします。」

さすが日本の技術者だ。
コチラが誠意を見せればキチンと答えてくれる。
目標も明確にしたら達成は可能だろう。

絶対に零戦みたいなムチャな相反する要求はしないからな。
フフフフ・・。

エンジンの音ぉぉ（後書き）

Gが暗躍し、海軍の航空機技術がチート化し始めます。

追記

このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

（閑話）　灰色男（前書き）

某小説に良く出る灰色男の出現です。

（閑話）　灰色男

Gです。
ハイパワーエンジンの開発ですが、周辺機器の開発で苦労しております。
エンジン自体は出来ても、プラグ、ハイテンションコード、パッキン、インジェクションと言う、エンジンを構成するのに必須な周辺機器がわが国は遅れてるのですよ。
コレって十年で出来るのか・・。

＜G君、いや田中君、苦労してる様だね・・。＞

突然、オレの目の前に灰色の男が出現したのだ。

アンタ誰??

＜驚かせてすまないが、私は敵では無い。
君が生前良く読んでたアノ手の小説の異界の人間とでも思ってくれ。
名前は・・・。
そうだな。灰色男とでも呼んで欲しい。＞

やはり出たか・・。
オレがこんな事してたら、絶対に出ると思ってたが。
まあ良い。使えるなら使おう。
どうせ併行世界よ。

灰色男さん、始めまして。

田中改めのGですよ。
所で、もしかして・・。

＜ウム。私が君をこの世界に飛ばせた張本人だ。＞

やはり・・・。
何らかの強い関わりが無い限り、
例え魂でも時代を飛び越えるなんて不可能だからな。
ついでだ。
無いモノを何とか出来ないか頼んで・・・。

＜G君、既に君の願いは適えておるぞ。＞

どう言う事？？？

＜君の考えてる周辺機器はすべてマザーマシンからインゴッドに資材に現物。
そして設計図までＰＯしてココに在る。＞

おぉぉぉ。
さすがチート。
コレがあればハイパワーマシンも開発可能となるな。
あんがとぉぉ。灰色男さん♪

＜放置して置くと、現実日本みたいに敗戦は必須となろう。
この悲劇を繰り返すべきでは無い。
日本は古き日本のまま時代を越させるべきだ。＞

その通りです。灰色男サマ♪
日本はけっして愚かな国では無かった。

一部のトップが愚かだっただけの事。
このGも愚かでしたけどね。

＜ウム。その通り。
お前と入れ替わったG本人はお前の予想通り・・。＞

あぽ～～んしてしもたのですね。
オレの代わりに。

＜傑作だったぞ。入れ替わったお前となったGは突然ダンプに轢き殺され、
それでも魂は身体から離れる事も出来ず痛覚の残ったまま火葬されてしまったのだ。＞

うわ・・。そりゃ残酷♪
まぁ特攻隊の勇士の皆様の痛みに比べれば、まだ軽いモンでしょ♪

＜ウム。ついでにお前の近所に住んでた天才博士、田島正も転生させたぞ。＞

何かヤな予感するのですが・・・。
まさかアノ方にですか？

＜その通り。N島正だ。＞

たしか田島は元気だったハズですが・・。

＜お前の事故から数年経過した時に火事に逢い自宅が全焼してしもたのだ。
どうせならと・・。＞

N島と入れ替えたんですな。
このオニ♪

＜フフフ。楽しい仕事だったぞ。
特攻隊の勇士の怨念も彼を喜んで焼いてたからな。＞

そりゃヤツは特攻隊の勇士を散々見送ってて、
自分はノウノウと戦後を謳歌してましたからね。
恨まれて当然ですよ。

＜まあヤツ等は処理した。
既に地獄でも業火に焼かれてるぞ。
さて今後の方針だが、基本的に私はお前のみ援助する。＞

灰色男様、私のお尻ならお貸ししますわ。

＜キモイ。吐き気するから言うな。＞

援助っつーから、身体が目的と思ったのにぃぃ。

＜黙れぇぇぇ。オレはノーマル。
綺麗な姉ちゃんが好きなの。
ハァハァ・・・。
ああ、言い忘れてたが、お前の部屋のみにＰＣとプリンターを設置
しておいたからな。
もちろんネットも繋いである。＞

ヤッフーーー♪

二度とＰＣ触れないと思ってたのにぃぃ。
あんがとぉぉ。灰色男様♪

＜消耗品は定期的に仕入れて置くぞ。＞

助かります。

＜私の事は極力バラすなよ。
歴史の修正力が怖いから・・。＞

了解っス。
しかしコレで楽になるな・・。
図面も手書きでは無くカラーでキチンと作れる。

＜この程度してもアメに勝つのは難しいだろうからのぉ。＞

そうっスね。
アメの工業力はハンパでは無いから。
ヤツ等に勝つなら、せめて二十年は時代を先取りしないとムリでしょっ。

＜ウム・・。そろそろオレの具現化の時間の限界が来たらしい。
オレは消えるが、今後も相談したい時はメールでも入れてチョ。
ＰＣにアド入れておいたからね♪＞

アッ、本当だ。
灰色男としっかり入ってる。

＜Ｇよ、頑張れ。アメを叩き潰し、陸助を叩き直せ。
そのために・・お前達をこの世界にトバセタノダ・・・・・＞

灰色男はそう言いながら消えて行った。
胡散臭いが、使えるモノは何でも使わないとね。
しかしＰＣか・・・。
うれしいなぁぁ。
この世界でもネット出来るなんて、ホンマにＧちゃん感激ぃぃ♪

（閑話）　灰色男（後書き）

やはり出しました。
ネ申ならぬ灰色男です。
Gはどうするのか？

追記
このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。
実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

ゼロ戦（前書き）

零戦（仮名）が誕生しました。

ゼロ戦

Gです。
灰色男のプレゼントにより、今後の作業が凄く楽になりました。
まさかこの世界でネットが出来るとは・・。
おかげで大半の設計図も入手出来ました。
ＰＯした設計図や計算書を各メーカーに渡したら、ビックラされましたよ。

おかげで日本の戦闘機、爆撃機の歴史は爆発的に変化しました。

余談ですが、陸軍から航空隊は消えました。

高野司令が「陸には日本の航空部隊を指揮する資格は無い。」と断言し、
航空製造権、その他はすべて海軍が独占。
パイロットの養成も海軍のみで行う事に。
ついでに、陸軍の徴兵制度も「赤紙」一枚で徴兵出来なくなりました。
何故？

天皇陛下様に併行世界での陸軍の悪行をすべてＤＶＤ付きで暴露したからですよ。

航空機製造会社からも無断で徴兵し、
日本でも数人と言われた熟練工を徴兵してたのは有名な話です。
陸助には地べたで走り回るだけがお似合い。
予算も陸が三、海軍が七と言う具合です。
恨まれましたが、おかげで２２６事件とかのクーデターも起こりそ

うにないです。

だって、陸の訓練とか教練には必ず民間からの監査が入る様になったのです。
ヘタを撃つと、陛下からのお叱りが下ります。
ムダ口とか搭乗なんかもクビにされましたしね（大笑い）。

ついでにシナへの進駐の取りやめや満州からも撤退しました。
アレも陸助が大半の仕掛け人でしたからね。

半島は放置です。ハイ・・。
アレとは関わりを持たないのが一番です。
攻めて来たら??
今の日本なら南北束でも返り討ちですよ。
投資した公金はドブに捨てたと思って諦めて貰いました。
どうせ同士討ちで破壊してしまいますからね。
関わらないのが一番です。

それよりも北方領土ですよ。
ナンでも油田とかあったみたいで・・。
満蒙開拓団の連中を北方領土に送り、アチラで油田の採掘をしてもらっております。
これがうまく逝けば・・。
開戦も相当遅らせる事が可能となりますよ♪

陸助やその他の事はこの程度にして置いて・・・。

ヤッフー♪

ついに昭和七年の段階で零戦（仮名）が完成しました。
既にこの世界では間違いなく世界最強でしょう。
パワーユニットは金星エンジン搭載の１５００ｐｓ。
速度は５８０ｋｍ出ます。
このままでもこの世界では当分困りませんけど、我々の野望は止まりません。

「高野少将、ついに零戦が完成しましたね。」

「ウム。併行世界の究極零戦が既に昭和七年の段階で完成するとは。
G，お前のおかげだ。
感謝する。」

「まだまだですよ。この程度で満足してたら我々は負けてしまいます。
ここ十年が勝負なんです。欧米を今の内に引き離しておくべきです。」

「そうだな。併行世界の私もパールハーバー攻撃の見た目の戦果に騙されて・・。
多くの民を死なせてしまってた。
Gから見せて貰った廃墟の日本を見た時はさすがに卒倒したぞ。
アレが自分の仕出かす未来かと思うとな。」

「その通りです。
所で大和は止められなかったのですよね？」

「ウム・・。艦船の建造計画はどうしようも無かった。
アレは使い道あるかな？？」

「防空戦闘に特化した仕様にしたら戦艦は使えますよ。
空母の直属護衛として戦艦は使うべきです。
そのための対空砲火も充実させておきましょう♪」

「そうか・・。
んじゃ、その設計図は何とか出来るか？」

「・・・・。調べておきます・・・・。」

高野さんもすっかり染まったな。
オレは某青いタヌキネコみたいに思われているのか？
まぁ色々とヤってしまったから・・。
だが後悔はして無いぞ。

余談だが、柴田は予科練の司令をしてもらってる。
淵田は空母航空戦隊の指揮だ。
二人共、常に最新情報を優先的に回してるから、
作戦や演習も常に最悪を想定しても勝てる参謀となってた。
彼等にはＰＣで未来の情報も教えてある。
親友だしね。

例えば夜間、寝てる時に敵機が低空から攻めて来て、基地が壊滅的打撃を受けた。
それでも地下に格納してる新鋭機で敵を叩き潰せる。
対空砲火も地下に格納してあるのだ。

八木博士とか盛田博士などをレーダー開発に回し、外国に八木アンテナの特許を
持って逝かれるのも防げた。
八木アンテナって知ってる？

ＵＨＦみたいな形のアンテナだが指向性がムチャクチャ高いのよ。
初期のレーダーは大半が八木さんのアンテナだったのは有名な話。
無能軍部がレーダーみたいなイロモノは要らないと八木さんにＮＯを言い渡し・・。
彼は仕方なく海外で特許を取り、海外の軍隊が美味しく使わせて貰ってたのだ。
アホだよな・・。

今は平和だが、十年以内には戦争の真っ只中に放り込まれてしまう哀れな子羊国家の日本には、
とにかく時間が足りない。
シナから手を引いたり、半島を放置したり、満州からも撤退したが。
それでもアメは我々に牙を剥くと思う。
それも確実に。

まずは国力だ。
大馬力のエンジンは現状では１５００馬力が限界。
どうしてもケルメットとかクランクの鋳造が難しいのよ。
これればかりは経験が必須。
機体に関してはすべての図面を国内メーカーに渡し、必要な機種のみを作成して貰う予定だ。
もちろんそのままで作るのでは無い。
キチンと強度を計算し、ムリと事故の無い飛行機として貰うのだ。

さて・・。
完成した零戦は皇紀の年号での命名とはせず、歴史通りのゼロ戦として採用。
海外の連中も招き盛大に宣伝したった。
何故って??

売るためですよ。
いやぁぁ、フランスとかイタリアが見事に食いつきましたね。
タイも一応、独立国ですから欲しそうでしたが、金が無いとか・・。
かわいそうなので金では無く、作物や掘り出した鉱石、原油との交換としました。
アメもショックを受けてましたね。
まさかこんな東洋の島国がこんな最新鋭機を開発出来るとは夢にも思わなかったでしょう。
あっ、売るのは友好国のみでっせ。
アメにも一応は売りました。
エンジンは劣化版の金星を付けてね。（笑）

「高野中将、売れましたね♪」

「ウム。アレだけの名機だ。そりゃ売れるだろう。」

「まあ、ベースの機体とは別にエンジン、武装はオプションとしましたけどね。
さすがにあのマンマでは売れませんよ。」

「そのオプションとやらも我々には優位となったな。」

「ええ、何せ同じゼロでも輸出ゼロと本家ゼロでは性能に格段の差が出るのですから。」

「ムフフフフ。
まあ、それでもこの時代の戦闘機としては破格の破壊力があるぞ。
輸出ゼロも・・。」

「コチラはさらに先を歩けば良いのですよ。

もう烈風はラインに乗ってますからね。」

「烈風は凄いな。
アレぞ戦闘爆撃機として使えるであろう。
パワーもありタービンも搭載。
また与圧室は出来て無いのだろう?」

「ハイ。さすがに与圧室は簡単ではありません。
ですが、開発は続行してますから、五年以内にはラインに乗せられると思います。」

「頼むぞ、G。」

ゼロ戦が売れる事により、我が国は輸出で工場は大忙しとなってた。
満蒙開拓団の連中も帰国し、国内の工場で雇用され国内の需要は潤い始めてたのだ。
まずは国だよね。
戦争の準備も大切だけど。

ゼロ戦（後書き）

ゼロ戦は輸出商品として売り出します。

追記

このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。

実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

日英同盟（前書き）

日英同盟です。
本作は作者の妄想で作られております。

日英同盟

Gです。
現在、昭和九年。
開戦予定まで七年しか残されていません。

自分は今、エゲレスに来てます。

何故って？

日英同盟のためですよ。
イギリスと同盟を結び、未来のマリーンエンジンＧＥＴＴですよ。
何故マリーンかって？
そりゃ飛燕のためです。
土井さんにも飛燕の詳細は伝えてありますが、開発はストップさせています。
飛燕はマリーンで飛ばすべきと考えたからです。
マスタングもマリーンで生き返りましたから、アレを搭載出来たら・・。

フフフフ。
飛燕がマスタングとなるのは確実ですよ。
やはりマリーンエンジンはこの時代の夢のエンジンですね。
さて、エゲレスにも当然ゼロ戦も輸出します。
十年は使える戦闘機ですからね。
この時代なら・・・。

「ミスター・Ｇ少佐、始めまして。
イギリス海軍のジョン・タルボルタ少佐です。遠い所をようこそ我がイギリス帝国へ。」

「ミスタータルボルタ少佐、始めまして。
日本帝國海軍のG少佐です。お時間を頂き感謝しております。」

（すんません。会話はエゲレス語です。）

タルボルト少佐とオレは今回の取引のための会談にバッキンガム宮殿に来てたのだ。
国を上げての大取引だが、技術的な事は我々が取り仕切る事になってた。

「それにしてもお宅のゼロ戦は素晴らしいですね。
我が国はまだ複葉戦闘機だと言うのに・・。」

（スピットファイヤーは開発中です♪）

「まだまだですよ。アレも改良の余地が残されていますから。」

「何と!!あの速度を出す戦闘機でも改良の余地があるのですか?」

「技術には終点はありません。所で今回の取引についてですが・・。」

「ええ、もちろんロールスロイス社の了解も取り付けて参りました。
それにしてもまだ海のモノとも知れぬマリーンエンジンが欲しいとは・・。」

「我が国は水冷エンジンは遅れてますからね。
次の戦闘機には是非マリーンエンジンを搭載したいのですよ。
ああ、そう言えばマリーンエンジンはキャブレター方式でしたね。

我が国ではインジェクション方式がこれからは主流となると考えています。
開発出来たら提供も可能ですよ。」

タルボルタの目はギラリと光った。
マリーンエンジンの現時点での最大の欠点は吸気機器だったのだ。
宙返りすると息つきを起こし、高度が落ちてしまうのだ。
だがエンジンの開発で精一杯で、フロート式キャブレターで凌ぐしか無いと言われてた。
そこへ・・この朗報だ。
逃してなるモノか・・・。

「G少佐、それは素晴らしい話ですね。我々も開発はしてるのですが。
今はエンジンの開発で精一杯です。
もし開発出来たら・・・。」

「もちろん友邦の国、イギリス帝国にもお伝えする・・予定ですよ。
まずは同盟ですよ。」

「ハハハハ。モチロンです。
我が国のトップも今頃は貴方達の国のトップと語り合ってる頃でしょう。」

オレ達が技術的な事を話し合ってる時には高野中将がチャーチルと共に会談をしてたのだ。
日英同盟のために・・。
高野さん、頑張ってね♪

所変わりまして・・。

マリーンエンジンを作ってるロールスロイスの本社です。
さすがに進んでますね。
コチラは。
特にシリンダーの製造とかバルブの製造に関しては、日本が追いつくのはまだ先でしょう。

「さすがイギリスの誇るロールスロイス本社だけありますね。
我が国の冶金技術はまだまだと痛感しますよ。」

「ですが、あのゼロ戦には驚かされました。
凄い運動性能に加え、速度も我々の主力戦闘機の倍近く。
試作中の戦闘機でも追いつくのは不可能です。」

「あの程度なら貴国なら数年で追いつきますよ。
所で飛行機に大切なのは何だと思いますか？」

「飛行機って・・。軍用機ですよね。
うーーん、量産して武器として大量に配備出来る。」

「そうです。それと凡庸性ですよ。
軍用機は言わば何でも出来るのが普通で無いといけません。
荒地には着陸出来ないとか、夜は飛べないとか、雨だと飛べない。
こんな事では軍用機は落第です。
雨だろうが嵐だろうが、そして困難な作戦だろうが。
何でも立ち向かえなければ軍用機では使えません。
ゼロ戦はその点では、まあ合格点の戦闘機ですよ。」

「そうですね。
２５０ｋｇ爆弾も搭載出来て、航続距離も千キロ以上飛行出来るって、

今の我々の飛行機では出来ない事です。視界も素晴らしいですしね。」

「出来ればバブルキャノピーにしたかったのですが、ガラスの一体整形技術が出来てませんので。
今回は見送りました。」

「フム・・。そうすると、一体整形はまだムリなんですね？」

「ハイ。次の世代の戦闘機には採用したいと考えていますが。」

「どうでしょう。それを我々に任せて頂けませんか？」

「Ｗｈｙ？もしかして一体整形が可能となってるのですか？」

「その通りです。
ですが乗せる飛行機がまだ無かったのですよ。
そこへ、貴国のゼロ戦の輸入で、アレにバブルキャノピーを搭載したら？
と、考えていました。」

「ナイスですね。
フレームの影に敵機が入る事もあり得るので、将来的にはバブル整形にしたかったのですよ。
でしたら、それも提供して頂けるのですね？」

「モチロンです。
それと整形マシンも一緒にお渡しします。」

「太っ腹ですな。」

「軍事同盟も結ぶ貴国だからこそです。
他国ではココまでは譲歩しません。」

「分かりました。キナ臭い世界ですが、同じ島国国家です。
万一の危機の時は万難を辞してでも貴国の救済に参ります。」

「宜しくお願いします。
では、ゼロ戦の方は・・。」

「当座、百機の輸出でお許しを。
それだけあれば貴国ならコピーも可能となるでしょう。」

「了解しました。
では、コチラはマリーンエンジンの設計図とマザーマシン。
そしてマリーンエンジン千機分をお渡しします。
同盟についての報酬はバブルキャノピーの整形マシンで・・。」

「ハイ。結構です。」

それからしばらくタルボルタと今後の戦闘機情報の交換に会話が弾んだのは言うまでも無い。

日英同盟（後書き）

イギリスと同盟を結びました。
コレで飛燕がマスタングとなる・・・かも。（＾―＾・）

追記
このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。
実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

独逸帝國（前書き）

今回は独逸帝國です。

独逸帝國

Gです。
日英同盟は無事結ばれました。

マリーンエンジンはロールスロイス社から技術者も派遣され、
日本の川崎重工明石工場で作る事になってます。
もうお分かりと思いますが、飛燕は日本のマスタングとなって出て来ます。
飛燕の長所とマスタングの特徴をミックスしたオバケ戦闘機になります。
飛燕の最大の長所はとにかく頑丈だった事ですからね。
音速近くまで速度を上げても壊れなかったと言うのは事実ですから。
何故、活躍が残されなかったのか不思議な位です。

さて今回は独逸帝國ですよ。
「イタ公抜きで今度は戦ろうぜ。」と言いたくなる位、独逸は好みです。
そう・・・。
日本は独逸、英国、日本の三国で今回は戦う予定です。
独逸ですが、ヒットラーが居ません。
よってハーケンクロイツも靡いてなくて、帝政独逸帝國のままでした。
調べて見ると「ヒットラー伍長」は軍隊には入らず、画家として頑張ってます。
妻のエヴァブラウンと悠々自適の生活をし、
ピカソとヒットラーは世界の画家として認められてました。
コレでいいんじゃネ?

独逸はビスマルク帝政のまま、戦後を送っております。
英国とも仲良く付き合う仲とか・・・。

「G中佐、貴国のゼロ戦は中々の出来ですな。
我が国もメッサーシュミットとハインケル、フォッケウルフと作成していますが、
まだ形にになるに至っておりません。」

「メッサーシュミット博士、Ｂｆ１０９は十年は使える戦闘機になると我々は確信しています。
卑下なさらず、開発に勤しんで下さい。
ただ、航続距離はもう少しあればとは思います。」

「Ｂｆ１０９は迎撃戦闘機（インターセプター）として開発したのですが、防空では無く、侵攻戦闘機に使われそうです。さすがに迎撃戦闘機として開発した飛行機が侵攻作戦に
使われるかと思うと、ヒヤヒヤしています。」

「博士、これは絶対に他国、特にソ連とかアメリカには漏らさないで欲しいのですが、
貴国の戦闘機でもある程度は航続距離を伸ばす秘訣があります。
コレは我が国と独逸の親交のための贈り物と考えてください。」

「ほ、本当ですか?まだ他国に知られていない技術を我が国、しかも私にですと?」

「ハイ。詳しくは後ほど設計図と現物をお渡ししますが。
爆弾形式の落下タンクを装備させるのですよ。
戦闘機に。」

「戦闘機に落下タンクですと?」

「ハイ。使い捨ての落下タンクを我が国のゼロ戦は装備しております。
コレは輸出ゼロ戦には備えておりません。
我が国だけの秘密ですから。」

「なるほど・・。確かにコレは知られると不味いですよね。」

「ココだけの話ですが、我が国独自のゼロ戦は既に航続距離は三千キロを凌駕してます。」

「なんと・・・。三千キロ以上も飛べるのですか?
戦闘時間も入れてですよね。」

「その通りです。もちろん輸出ゼロ戦は落下タンクも装備出来ません。
これは敵に知られると重大な失策に繋がるからです。
それでも今の時代なら、数年は追いつかれる事は無いと自覚はしてますが。」

「その通りです。
我々の試作メッサーでも、貴国のゼロ戦よりも性能は下です。
ただ、同盟を結ばれる国にはその日本版のゼロ戦の秘密を教えて頂けるのですよね。」

「その通りです。
信じるに値出来る国には秘密は極力持ちません。」

「有難い話です。我々も日本帝国とは良きお付き合いを望んでおり

ます。」

「ココでけのお話にして欲しいのですが、我々は数年以内にはソ連が貴国に攻め込むモノと考えています。軍備は十分でしょうか？」

「未だに我が国は第一次世界大戦の始末に追われ、軍備は不十分です。
そのためには貴国みたいに技術も軍備も見識もある国との同盟は大変有難く思います。」

「我々も同じですよ。我が国はアメリカやソ連からは東洋の小国と罵られておりますが、
その我々でも最先端の戦闘機を輸出出来るのです。
ただ、我が国は海に囲まれております。
そのため、陸軍での航空機開発は断念させました。
理由は陸しか飛べないパイロットなんて不要だからです。」

「耳の痛い話ですが、理解は出来ますね。
我が国も大国に囲まれ、ある意味欧州の陸の孤島でもあります。
我が国のビスマルク総統も好戦的な人ではありませんが、攻めて来られたらお引取りして
貰うしかありませんからね。」

「その通りですよ。我が国もシナにも手出しせず、国の中で出きる事のみに専念してるにも
関わらず、アメリカからは色々と介入を入れられて困っております。
そのためには同盟国を求め、国の力を強化するべきです。」

「同意出来ます。日本帝国と英国、そして我が独逸帝国との三国で

薄汚い大国との勢力に
対立出来る力を付けるべきです。」

「そのための同盟ですからね・・。」

メッサーシュミット博士や独逸空軍、海軍との交渉はうまく行きそうだ。
軍事、ならびに国との同盟も結ばれた。
独逸からは膨大なマザーマシンと最新技術の提供が。
我が国からはゼロ戦百機と空母、戦艦の設計図。
そして航空機技術の秘密が渡された。
独逸も周辺友好国に出来上がったメッサーシュミットＢｆ１０９を輸出開始し、
経済力と周辺諸国の友好化。
武力の強化に努めてるらしい。
我が国も頑張らないと。
ただし特定三国以外とね。

独逸帝國（後書き）

独逸帝国との友好条約が結ばれました。

追記です。
このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。
実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

パイロット（前書き）

予科練の改革に入ります。

パイロット

Gです。
ヨーロッパ巡りからようやく帰国しました。
国内は戦闘機の輸出で活況となってます。
外貨が入ると言うのは、国力の増加にも繋がりますね。
戦闘機で外貨を稼ぐと言うのもアレですが、売れるモノなら売るべき。
陸軍が軍縮に入り、赤紙と言う名の徴兵も過去の話となりました。
軍隊は基本的に志願制度で良いのです。
一家の大黒柱を赤紙一枚で取り上げると言うのは、国力の低下にも繋がります。
女子供では、一家を支えられませんからね。

さて、予科練です。
陸軍航空隊が無くなったので、国内のパイロットはすべて海軍が養成する事になりました。
元々の陸軍パイロットも海軍に入り、航法とか着陸訓練のやり直しをさせられてます。
彼等を空母に下ろすなんて自殺行為ですからね。
まずは海軍式の三点着陸のマスター。
次が航法訓練です。
推測航法は海軍パイロットには基本ですから。
陸軍のパイロットは飛ぶだけの仕事ばかりでした。
彼等も海軍に入り、その覚える事の多さには閉口してました。
海軍式に慣れればすぐに使える様になるでしょ。

予科練ですが、重爆と戦闘機のパイロットの養成に専念する事になりました。

重爆は四発機を開発、（一式陸上攻撃機を四発化しました。）
戦闘機は迎撃機、艦載機、進行戦闘機の三種類がメインとなります。
迎撃戦闘機は雷電と開発中のジェット戦闘機。
艦載機はゼロ戦が小型空母、烈風が大型空母に搭載。
侵攻戦闘機は飛燕です。
飛燕はマリーンエンジンを得た事で、史実のマスタング以上の戦闘機に化けました。
土肥さんも大喜びですよ。
パワーに余裕もあり、高空も飛べる。
日本海軍の陸上戦闘機はこの四種類で賄います。
ジェット機は国内のみで運用です。
まだまだ外には出せません。

予科練ですが、史実みたいに甲飛とか乙飛とかの区分は一切してません。
すべて期で表記しています。
彼等は日本を支えるエリートなのですからね。
兵学校出身者は事務に専念する事にしました。
隊長と言う名の赤子を優秀なパイロットにさせる訳には行きませんからね。
パイロットはすべて予科練出身者のみで編成しています。
おかげで現場の部隊からは大好評です。
煩い甲板士官が事務職で大人しいヤツばかりになったと・・。
一応、彼等も飛行訓練は受けてますが、飛ばす事はありません。
邪魔です。ハイ。

その後の日本では「大空を舞え、若者よ。海軍予科練飛行生徒募集中。」の
ポスターが兵学校よりも高い人気を誇る様になりました。
兵学校は基本的に事務職ばかりです。

そして「ココ」が一番違うのですが、功績を立てた兵士は士官はおろか、将軍クラスへの
道も開ける様にしました。
ボンクラ士官ばかりが将軍となってたから昭和の将軍は大半がボンクラだったのですよ。
兵学校は事務系の学校と成り果てました。

また既存のパイロット兵士も高い技術を習得した兵士は、
士官教育を施しガンガン昇進させます。
柴田も淵田も、そして高野大将も大歓迎ですよ。
日本が弱くなったのは、士官がボンクラばかりだったからです。
艦艇の古参下士官も士官となれる様にしました。
彼等を古株として腐らせるのは宝の持ち腐れですから。

我々の目的は最終的に「世界一の海軍」を目指す事です。

放置してたら日本海軍は滅ぼされてしまいます。
現在、昭和十一年、開戦予定まで五年となりました。

パイロット（後書き）

予科練と士官制度の改革をしました。
兵学校出身者ばかり優遇した海軍は狂ってましたよ。
古参下士官こそが海軍の要だったのにも関わらず、ボンクラばかり重宝し、
海軍を潰したのですからね。

追記
このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。
実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

空母（前書き）

いよいよ新鋭空母の誕生です。

空母

Gです。
ようやく・・・。
空母が生まれ変わりました。
既存の空母もすべて改造し、１９６０年代から流行り始めたアングルドデッキ形式の空母です。
カタパルトを装備し、着艦は斜めアングルドデッキに。
離艦と着艦が同時に出来るのでパイロットからも大好評です。
エレベーターはすべて艦外に装着。

いや～～！！
楽ですよ。こりゃ。
何故、この様な形式が戦前から流行らなかったのか不思議です。
あ、空母は我が国のトップシークレットです。
海外にも、そして同盟国にも見せません。
知られるのは戦争が始まった時のみですね。
艦隊は日本海か東シナ海で演習してます。

艦隊として見せる場合は練習空母のみ公開してます。
赤城、加賀は機関の換装を行い、速力も３２ノットまで出せる様にしました。
低速の空母ではイザと言う時に大騒ぎになりますから。
空母の艦長には、パイロット出身の古参下士官上がりの将官を据えました。
元々がパイロットですので、判断も的確。
逆らう下士官は皆無です。
やはり古参下士官を冷遇してた旧海軍は狂ってましたよ。
見て下さい。

我が機動部隊の精強ぶりを。
パイロットは全員叩き上げ。
ヘタレ士官はすべて事務です。
一応パイロットの資格は持たせていますが、複葉の連絡機に乗せる程度です。
なを、士官となる元下士官にはしっかりと海軍士官学校に出頭させ、士官教育を施しております。
もっとも彼等は軍務にも精通し、作戦関連のみを仕込めばＯＫですからね。
副艦長や基地司令を数年経験させたら海軍大学に出頭させ、海軍の要となって貰います。

兵学校は今や帝國大学同様の事務系統学校と成り果て、
有能な頭脳「だけ」の持ち主の集う学校になりました。

「高野長官、いかがですか？未来に現れる予定の空母の感想は？」

「Gよ、凄いモノだな。
まさか離陸と着艦が同時に出来る空母になにるとは・・。
それにあの舷外エレベーターは素晴らしい。
全く空母の威力を損なう事無く艦載機を収納出来るとは・・。
我が国の艦隊設計は間違ってたな。」

「まだまだ未来にならないと、出現しない空母ですからね。
アメリカでも終戦間際にならないと舷外エレベーターは出現しません。
それでもアメリカの空母はダメコンも素晴らしい活躍を見せます。」

「ウム。我が国の海軍艦艇乗員には戦闘訓練同様にダメージコントロールの訓練も

徹底しておく様に通達しておく。」

「お願いします。艦艇を失う事は我が国の貴重な資源の喪失と同様です。
沈みさえしなければ、艦艇は修理して使えますからね。
それと・・・・。」

「分かっておる。パイロットの落下傘訓練だろう?」

「その通りです。
いずれは射出式のコックピットを作る予定ですが、まだそこまでには至りません。
経験豊富なパイロットは戦闘機十機よりも高価な資産なのです。
自爆強要なんて愚かな事は絶対に避けてください。
部隊にも徹底をしておくべきです。
これは艦艇乗員も同意語ですよ。」

ムチャな戦訓の犠牲となった多くの戦士の魂がそんな事を自分に言わせるのか?と、
オレは考えもしたが、陸軍の兵士の数倍は金がかかるのが海軍の兵士なのだ。
一人の兵士を失うのは国費を失うと同意義。
戦闘で戦死するならともかく、無駄な自爆強要なんて絶対にしてはならぬ。
コチコチの明治男にはそろそろ現場から離れて貰う時期だな・・。
戦争が始まる前に叩き上げの下士官上がり士官のみを実戦に出せる体制にしないと。

「高野長官、そろそろ古くから居座る年功序列の石頭さんには・・。」

「ウム。海軍大学とか閑職に回そう。
彼等が後の悲劇の元凶ともなるのだからな。
自分も含めて・・・。」

「長官はまだまだ頑張って貰わないといけませんよ。
私が色々出来たのも理解者である長官が居たからこそです。
改革が完成するまでは頑張って貰います。現場で。」

「そ、そうか・・・。
まだ自分は必要なのか・・・。」

何だ?
高野長官の目がウルウルしてるぞ???

「自分の愚かな真珠湾攻撃で日本の臣民に塗炭の苦しみを与えた事を考えるとな。
自分が死ぬのは構わぬが、日本臣民やヒナ鷲の連中を地獄に叩き込んだ事だけは、
例え自分が地獄に落ちても忘れる事は出来ぬ。」

「長官、もうその未来には絶対になりませんよ。
幸いにも国力は増えつつあります。
万一ハルノートを叩き付けられたら・・・。」

「分かっておる。
返事を曖昧にしてノラリクラリと出来る限り時間を稼ぐのだな。」

「ハイ。それと第一撃だけは敵に叩かせます。
ボテクリ叩きはさせませんがね。」

「沈めても構わぬ艦隊に偽装を施し立派な戦艦に見せかけるのだろ？
もう準備してある。
見た目は長門に見える輸送船戦艦モドキだがな。」

「運用させる船員は攻撃の予兆を感じた時点で全員脱出させるのですよ。」

「モチロンだ。無駄な死者は絶対に出してはならぬからな。」

「ヤツ等の得意顔が眼に浮かびますね♪」

「フフフ・・。そうだな。
ヤツ等が知るのは戦後になるのは確実。
それまでは日本の戦艦を沈めたと国中が大騒ぎになるだろう。」

「我が国の大本営にも徹底させてくださいね。
被害は大きめに。戦果は少なめに・・ですよ。」

「分かっておる。
陸軍の無能は全て中枢から叩き出した。
我が海軍の無能もリストアップしておる。」

「でも山口多門、小沢治三郎、その他リストに掲載しておいた要員は絶対に残して下さいよ。
特に山口司令は日本の宝です。」

「多門丸はそんなに優秀だったのか？」

「私達の知る歴史の山口司令は日本海軍最高の働きをしております。

逆に惨かったのが、私、ことGと南雲さんですよ。
そして・・・。」

「ウム、皆まで言うな。
自分も同罪だからな。彼等には悪いが後方基地の司令として彼等には働いて貰う。」

「お願いします。私も歴史上のGとはならない様に頑張りますので。」

「お前が居たからこそ、今の日本があるのだ。
絶対に死ぬなよ。」

「我々はバックアップとして、日本の後方を守りますよ。
下手糞が前線に出ても邪魔なだけです。
戦争は準備と作戦と訓練が全てですよ。
戦う前に不安要因は全て消しておけば、我が軍の優秀な下士官が戦場で戦ってくれます。」

「そうだな。
我々が戦場に出るのは彼等には邪魔でしか無いだろう。
我々は後方で彼等のお膳立てに徹しよう。」

「頑張りましょう。高野司令。」

高野さんも気にしてたのだな。
並行世界の自分の仕出かした事を。
だが、もうそれは起こらない。
起こしてはならないのだ。
まあ今は日本は平和国家だ。

一応は・・。
コレで開戦までの時間も稼げるだろう。
何とか数年でも遅らせる事が出来たら・・・。

空母（後書き）

アングルドデッキの空母が完成しました。
全て既存の空母を改良。
大和と武蔵は戦艦にしましたが、信濃は最初から空母として起工してます。
誕生は開戦前を予定してます。

追記
このＳＳの中に出る人物は実在の方と妄想の中の人物が混在した架空世界です。
実際の歴史とリンクはしてますが、現実歴史とは違う世界となっています。

英雄（前書き）

武器関連はそろそろ置いておいて・・・。

英雄

Gです。
現代日本で知られてる日本のトップエース達が我が海軍航空隊に出来る限り揃えました。
加藤隊長、彼こそは総司令に相応しい人間と思います。
高齢にも関わらず、最前線で部下と一緒に泥と血に塗れ、インド洋に散った英雄。
坂井三郎。
批判はあれど世界から尊敬されたエースです。
岩本徹三。
西澤と共に日本のトップエースとして知られてました。
西澤広義。
岩本ノートが公表されるまでは日本のトップエースとして知られてました。
菅野直。
知る人ぞ知る菅野ブルドッグ。兵学校ではエースの道が無いと知り、予科練から兵卒として海軍に入隊。
メキメキと腕を上げてます。
笹井醇一。
ラバウルのリヒトフォーヘン。ボンボンですが気合の入ったいい顔してますね。
彼も兵学校には入らず、予科練に来ました。
その他未来のエースは全て我が海軍に・・・。

正直笑いが止まりません。
戦争が始まったら、彼等には命を大切に戦って貰う予定です。
何としても彼らだけは死なせてはなりませんよ。
軍部の方針として、英雄はキチンと新聞で公表し、定期的に故国で

表彰する予定です。
そう・・・。
戦時中の独逸空軍やアメリカみたいにヒーローとしても扱います。
彼等は国の宝です。
ただ、ある程度戦ったら内地に戻って貰いますけどね。
陸軍航空隊が消えたおかげで、航空部隊にも余裕が出ました。
キッチリとローテーションで部隊を回します。

「加藤少佐、貴方に今後は我が海軍航空隊の総指揮官として戦って頂きます。」

「・・元、陸軍航空隊の私如きにその様な重責を・・。
この加藤、命を削ってでも重責にお答え致します。」

「イヤ・・。死んで貰っては困るのですがね。
既にご存知とは思いますが、数年以内には我が国は戦争に巻き込まれるでしょう。
その際は我々は生きて母国に奉仕しないといけません。
特にパイロットは育成に膨大な年月と国費がかかります。
普通の兵士とはケタが違うのです。
加藤さん、貴方には彼等に命を大切にして戦う様に指導して欲しいのです。
潔く散るなどとバカな考えは流行らせてはなりません。」

「分りました。G中佐。
この加藤、命続く限り若人の飛行兵士の命を大切に、部隊を率いさせて頂きます。」

ヨッシャ。
加藤隊長が部隊を率いてくれたら安心だ。

陸軍航空隊でも加藤部隊だけは別格だったからな。

未来のエースがすべて手に入り、後は実戦経験のみ・・。
どこか適当な戦場は・・。
アッ、あったぁぁぁぁぁ。

そう・・。
内戦が続くシナですよ。
もちろん公式な軍隊としてではなく、日本軍を一時的に退役して貰い、
義勇軍として参加させるのです。
蒋介石率いるシナ国民党軍に参加させ、協賛党軍との戦いに関与させるのです。
目的??
そりゃ経験を積ませるためですよ。
日中戦争の目は潰しましたが、内戦は相変わらず続いてるのがシナ。
蒋介石もコチラの事情を話すと、諸手を上げて賛成してくれました。
コチラが欲しいのは経験のみですからね。
戦闘機は自前ですし、パイロットも貸し出し。
通称、空鮫部隊として後に恐れられる部隊が誕生です。

シナ協賛党軍のバックはソ連ですが、戦闘機はＩ－１５です。
複葉のクルクル回るしか無い戦闘機ですから、
戦闘機の性能に格段の差があり、かすり傷すら負わせられません。
何分にも経験を積ませるためのみの義勇軍です。
戦士の皆様には絶対にムリはするな。
一撃離脱のみに徹しろと徹底しております。
とにかくソ連軍機は雲霞の如く湧き出て来ますから、いくら落としても減りません。
我が軍の戦闘機はアシは長いですから、敵に攻め込まれる事はあり

ません。
侵攻して叩いて引いての繰り返しです。
適当に戦わせたら国内に引いて貰い、次の部隊と交代。
交代した部隊は休養させた後に国内の部隊で戦訓を後輩の伝授。
実戦に勝る経験はありませんからね。
一応無償ではあまりなので、シナ国民党軍から敵機撃墜の度にボーナスを出して貰ってます。
まあ五機も落としたら交代させていますので、チョイエースが誕生する程度です。
あ、戦闘機は飛燕をＰ４０モドキにして参加させてます。
ラジエターを前面に移し、シャークマウスを書いて・・・。
そう・・。
実史のフライングタイガースが日本軍関与と言う形で出現。
協賛党軍からは空飛ぶサメと恐れられる存在となりましたが、撃墜される戦闘機は皆無なので、
正体がばれる心配もありません。
定期的に本国に召還してますし、戦闘機もオーバーホールの際はバラバラにして本国に
送り返しています。
加藤隊長もモチロン参加して貰いました。
いや、この方はカッコイイです。
鬼隊長として知られてましたが、人情家でもあります。
自分で落とした敵を想い、夕餉を敵に捧げたり、撃墜した敵には必ず敬礼で
見送ったり。
まるでレッドバロンですよ。
世代的には同世代に近いのか・・な?
坂井さんや岩本虎轍、笹井、西澤も腕を上げて来ました。
五機に撃墜が達したら本土召還と決まってるのに、彼等は帳簿を改定して、

機数を誤魔化し、三十機も落としてます。
まあ他の連中ならともかく、要のエースには甘くして置きましょう。
蒋介石からは我が義勇軍の事が漏れる心配もありません。
安心して練習代わりに空中戦の実戦経験を積ませられました。
こうして戦う事、数年・・・。

いよいよアメリカが改訂版のハルノートを我が国に叩きつけて来ました。

いよいよ開戦か。

英雄（後書き）

実戦に勝る訓練はありません。
次回は開戦・・・かも・・・。

ハルノート（前書き）

歴史は頑強な河の流れの如く変えられないモノなのか・・。
やはりこの世界でもアメリカはハルノートを突きつけて来ました。

ハルノート

Gです。
やはりハルノートは突き付けられました。
内容ですが、シナ義勇軍の撤退。
戦闘機輸出の即時停止。
すべての戦闘機をアメリカのみに輸出。
軍備の削減。
トラック諸島の返還。
その他日本が飲めないモノばかりです。
飲まない場合は戦争も辞しないとか・・。

ま、予想はしてましたから、慌てる事はありません。
大臣にもノラリクラリと交わせと通達してありますから。

「高野長官、やはり来ましたね。ハルノート。」

「ウム。歴史は繰り返すと言うのは本当だな。
いかに努力しても重大な歴史は変えられぬと言う事か・・。」

「でもご安心を。
陸軍は既に帝國軍の一部となり暴走する事は不可能。
我が海軍も安易な開戦は・・・、しません。
安易な開戦はね。」

「Gよ。既に偽装艦隊はトラック~ 硫黄島間をブラブラと往復航海
しておる。
もう少ししたらアレも・・。」

「敵が食い付きますね。トラックは空なんでしょ？」

「ウム。壊されてもすぐに修復出来る建物しか残してはおらぬ。
燃料補給は巨大タンカーを造ってたからな。」

「据え置きのタンクなんてカモでしかありませんからね。
タンカーには護衛をしっかりと付けてて下さい。
ある意味戦艦よりも大切な存在です。」

「当然だ。アレは我が国の至宝だからな。
アレで艦隊すべてを賄える。航空隊なら機動部隊と基地航空隊全てだ。
これだけの燃料を喪う事は絶対に避けなくてはならぬ。」

「その通りです。併行世界の日本帝国は輸送船団の護衛を疎かにして、糊口を凌ぐ事が
出来なくなり、敗戦に追い込まれました。
潜水艦対策と輸送船護衛こそが勝利への近道です。」

「ウム。戦闘機乗りには向かぬパイロットは対潜部隊のパイロットとして輸送船護衛空母に
乗り組みを命じてる。不満はある様だが、大局のためには文句は言わせぬ。」

「その通りです。激しい機動は出来ない体質の人間でも穏やかな飛行なら出来る人間は
大勢居ます。彼等を逃してはダメですよ。
対潜部隊とか大型爆撃機には向いてるのですから。」

「対潜航空機の威力はバカに出来ないモノだな。

今の我が国で、コレだけの対潜哨戒機が出来るとは・・。」

史実の東海対潜哨戒機は既に訓練でも抜群の威力を発揮してたのだ。
この時期でも開発可能で、長時間船団の上空を哨戒出来る素晴らしい機となってた。
護衛はゼロ戦。（ゼロ戦には型は存在せず、単にゼロ戦としてた。）
日本海軍のＦ４Ｆとして大活躍している。
既に第一線の艦載機は烈風２１型が常備。
ゼロ戦は護衛空母や輸出仕様として頑張ってる。
ぬかりは無いとは思うが、戦争に確実な勝利は無い。
始めるからには、絶対に負けてはならないのだ。
負けてはね。

その頃のＵＳＡ（ウサ）

「糞っ、ジャップめ。
我々が連合軍としてソ連を攻める予定だったのが予定が狂った。」

「偉大なる合衆国大統領、彼等はイエローモンキーですよ。
ヤツ等が絶対に飲めない条件を突きつけ、開戦に踏み切らせば良いのです。」

「ヤツ等が飲めない条件??」

「ハイ。ヤツ等はゼロセンの輸出や旧式ライフルの輸出で国を潤しています。
その輸出をすべて我が国のみに向ける様に要求するのです。
もちろん買値は二束三文でね。」

「フム・・。
それならヤツ等はサルの如く、怒り出すな。」

「その通りです。
政治もロクに出来ないイエローモンキーですから。」

「その他の事も含めておくべきだな。
イマイチインパクトに欠ける。
また、ヤツ等が挑発に乗らぬ場合は・・。」

「我が偉大なる合衆国海軍の出番です。
ヤツ等のビッグセブンの二隻を沈めてしまえば良いのです。
我々には４０ｃｍガンを持つ偉大な巨艦が犇いているのですから。」

「フム・・。
どう考えても負ける要素が無いな。良かろう。
ハル、君の名前でイエローモンキーを叩き潰す内容を突きつけたまえ。
すべて許可しよう。」

「お任せを。
偉大なる合衆国大統領・・・。」

こうしてハルノートが完成。
日本大使に手渡されたが・・。

「合衆国の要求はあまりにも一方的だ。
コレでは黙って詐欺に遭えと言うのと同じだ。
我々はこのハルノートを詐欺ノートとして世界に通報する。

世界の民よ。
アメリカ合衆国はこんな詐欺の要求を我が国に突きつけてる。
文明国家のする事か？
我々は世界に問う。」

と・・。
ハルノートの内容をすべて世界に暴露してしまったのだ。
赤恥をかいたのはアメリカだった・・。

ハルノート（後書き）

この世界の日本は割合、大人です。
実際のハルノートもノラリクラリと交わせば良かったと思います。

ハルノート2（前書き）

ハルノートの続きです。

ハルノート2

日本外務省は今回はいい仕事しました。
ハルノートを原文のまま世界の新聞に公表したのですから。
おかげでアメはいい恥さらしです。
武力と国力を背景に日本を恫喝したのがバレたのですからね。
こらちに非が無いのなら、包み隠さず公開するべきです。ハイ。

「高野司令、今回の外務省は良い仕事しましたね。」

「ウム。ボンクラを追放してて本当に良かった。
おかげで世界のアメリカを見る目が悪化の一途だ。
そろそろヤツ等もキレる頃合か？
Gよ。」

「もうそろそろでしょうね。
お陸奥とお長門はまだ健在ですか？」

「ウム。何時攻撃を受けても逃げられる様に通達してある。
一応少しは反撃するのだろ？アレ・・。」

「対空砲火のみは少しだけ装備してあります。
敵を感知したら自動で砲撃。まあ数分で止まりますけどね。」

「ヤツ等が大喜びで長門や陸奥を撃沈したと大騒ぎするだろうな。」

「実際の長門は・・・。」

「ウム。既に改造に入ってる。」

そう、長門と陸奥は今回の騒ぎで撃沈された事になるのだ。
公式には。
実際には機密ドックにて大改造を施し、機動部隊に追従出来る速力を持つ、
機動防空戦艦として改造してるのだ。
名前も変わり、防空戦艦薩摩、札幌となるのだ。
誰が見ても長門とは分らない艦形になる。

その頃のＵＳＡ（ウサ）２

「ハル国務長官、どうなっているのだ？
日本はハルノートを世界に公開してしまったぞ。」

「まさか彼等がこの様な愚考を行うとは・・。
まさに想定外でした。」

「世界の目は我がアメリカ合衆国に厳しくなってる。
これを挽回するには、もはや・・。」

「ジャップを叩き潰すしか無いでしょう。」

「ヤツ等の戦艦はどこに居るのだ？」

「偵察潜水艦の報告に拠りますと、トラック諸島と硫黄島の間をパトロールしてるそうです。」

「艦名は何だ？」

「ナガトとムツです。」

「Ｇｏｏｄだ。日本から４０ｃｍガンを持つ戦艦を消す好機だろう。」

ルーズベルトは海軍総司令部を通じ、マリアナ諸島近辺をパトロールしてる日本海軍の
戦艦を撃沈せよと命令を下したのだ。
宣戦布告は撃沈寸前でヨシと考えてた・・。

「司令、ついにヤツ等がお陸奥とお長門に食い付きました。
どうも撃沈と同時に宣戦布告らしいですよ。」

「ヨシ、敵が攻撃を開始したと同時に実況中継でＳＯＳを流せ。
我が帝國海軍の戦艦が自国領海内で無法な攻撃をアメリカに受けてるとな・・。」

中身は日露戦争当時のガラクタ輸送船なので沈めても惜しくは無い。
ただ船員の安全だけは万全にしておかないと・・。

「急げ！！もうすぐアメが食い付いて来るぞ。」

二隻の戦艦モドキを運航させてた船員は船をオートパイロットにして脱出にオオワラワだった。
海軍の指令は「死ぬな。」の一言のみ。
任務は既に終わったのだ。
日頃の準備のおかげか、攻撃開始二時間前には脱出完了。
空からは認識されない様に水色に塗装した脱出船で攻撃が始まるのを彼等は見てた。
間もなくグアム島と機動部隊から出撃して来た爆撃機が戦闘機を伴

い、お陸奥とお長門に
攻撃を開始した。

「ヨシ、早速電文を流せ。」

「コチラ、センカンナガト、アメリカニヨルコウゲキヲウケツツアリ。」

「コチラ、センカンムツ、アメリカニヨルコウゲキデシズミツツアリ。」

「コチラナガト。ワレスデニチンボツスンゼン。キュウエンをコウ。」

「コチラムツ。テンノウヘイカバンザイ。」

「ヨシ、これで任務完了だ。敵に気づかれない様に撤収だ。」

任務を終えた彼等は海の色に紛れ、敵に感づかれぬ様に脱出。
無線を傍受してた日本帝国側は、傍受した電文を生のまま、全世界に放送。

「今八日、帝國海軍戦艦長門と陸奥は、卑劣な米国軍の奇襲攻撃を受け、轟沈。
数千名の犠牲者と二隻の戦艦を喪失せり。
なを宣戦布告受諾前だったため、我が軍は反撃も出来ず。
アメリカ合衆国に問う。
宣戦布告も無しに他国領海の軍艦を攻撃するのは如何に?」

「不味いぞ。ハルよ。
コチラが宣戦布告前に攻撃したのがバレてしまった。」

「大統領、それなら開き直るべきです。
我が軍の航空機が攻撃を受けたためやむなく反撃したと。」

「だが沈没地点は紛れも無く敵の領海内だぞ。
どう釈明する気だ？」

「我がアメリカ合衆国は正義なのです。
卑劣なジャップを潰しただけの事。
大統領、貴方は偉大な合衆国大統領なのです。
勝てば良いのですよ。戦いは。」

「フム・・。
私とした事が・・。弱気になってた様だ。
そうだな。既に戦端は開いてしまったのだ。
戦いは始めたが最後。
勝つまでは止められぬ。
要は勝てば良いのだ。
ハル。
日本大使館に宣戦布告を通達せよ。」

「大統領、既に日本側から宣戦布告通達書を渡されております。」

「くっ・・。後手だったか。
まあ良い。全軍に通達せよ。
太平洋からジャップを叩き出せ。

ヤツ等を潰せ。太平洋は我が合衆国の海とするのだ。」

ハルノート2（後書き）

遂に開戦です。
偽装戦艦お陸奥とお長門は見事に仕事を終えました。
ホンモノは改造中です。
次回から反撃開始です。

開戦（前書き）

お陸奥とお長門の撃沈に拠り、日米間戦争の開戦です。
ええ、日米だけですよ。ハイ。

開戦

Gです。
いよいよ開戦となりました。
お陸奥とお長門の撃沈事件は世界に公開しました。
沈没地点もね。
乗員はすべて現時点で鬼籍に入ってる元海軍兵士並びに士官ばかりです。
彼等には少しだけ長生きして貰い、戦死扱いとしました。
遺族は大喜びです。ハイ。

アメには「卑劣な攻撃を受け我が国の大戦艦が二隻も喪失してしまった。
これは重大な事件だ。ウヤムヤには出来ぬ。
損害を支払ってくれないなら、開戦も辞せず。」

そう通達したら、向こうさんはとっとと開戦の書類にサインをしやがったのです。
まあ大国は悪さをしても認める事はしませんね。
もっとも世界の目は厳しいです。
同盟国のイギリスやドイツは我が国に同情的です。
さて、開戦と決まったら・・・。
戦うのみです。
幸いにもイギリス、ドイツとの友好条約でインドからも資源が潤沢に入ります。
邪魔なのは・・・。
フィリピンの在比米軍ですね。
邪魔なモノは潰すとしますか・・。

「諸君、いよいよ開戦だ。敵はアメリカ一国のみ。
強大な敵ではあるが、簡単に負ける事は無いだろう。
さて、我々の邪魔となるのは、在比米軍だ。
特に空軍と海軍は邪魔だ。
アレを潰さぬ限り我が帝國の輸送船団の危機は去らない。
何としても潰せ。」

高野長官の訓示に拠り、在比米軍基地の攻撃が決定。
早速膨大な重爆と戦闘機軍団が比島に押し寄せて来た。

「何だ?我が国のＢ１７でも飛んで来たか?」

「マッカーサー長官、大変です。アレは我が軍の重爆ではありません。
翼に醜いミートボールが書いてあります。アレは敵です。
ただちに避退してください。」

「我が軍のカーチスが撃ち倒すだろう。それを眺めるのも楽しみよ。」

「長官、危険です。逃げてください。」

やがて轟々と轟く爆音と共に大空に空中戦の花が咲き始めた。
漢達の命を掛けた死の花が・・。

「ジョン、ジャップのボロ戦闘機が攻めて来やがったぜ。
俺たちのカーチスなら一撃で撃墜だ。」

「トニー、油断はするなよ。
ヤツ等はゼロも作った国だ。負けはしないとは思うが、命は一つ。
被弾したら迷わず脱出しろよ。」

「ああ、任せろ・・。」

やがて彼等の面前に見た事の無い重爆と戦闘機が押し寄せて来た。

「クッ、スゲー数だ。押し止めるのは難しいぞ。
今すぐ基地に救援を依頼しろ。我々だけではムリだと・・・。
おい、ジョン。どうした?返事しろ・・。」

その時には高空から急降下奇襲攻撃をかけられジョン中尉のＰ４０は火達磨となって落下してたのだ。

「クソッ、ジョンが殺られた。あれ程油断するなと言ったのに。
グッ、スゲー機動をしやがる。
は、速い。それに・・。何だ??
あの翼から出てる太い棒は・・・、まさか、キャノン??」

トニーがそこまで考えた時、烈風の両翼から四門の２０ミリ機銃が吼え、
トニーの乗るＰ４０は爆散して果てた。

マッカーサーは基地総司令部の窓から自軍の戦闘機が狩られるのを呆れた顔して見てた。

「な、何だ??
アレは・・。」

「総司令、我が軍の戦闘機は壊滅です。
間もなく爆撃が始まります。早く地下壕に逃げてください。」

「わ、分った・・。」

爆撃体制に入った一式重爆の胴体から多くの爆弾が落下を始めたのは、それからすぐだった。

一式重爆は本来、一式陸攻として開発される予定だった双発爆撃機を四発とし、被弾能力を
向上させ、反撃能力は後のＢ１７以上とした海軍の攻撃機である。
まだ与圧はしていないが、二年以内には与圧を装備予定である。

ひゅーーーと風を切る爆弾の落下音が鳴り響き、やがてクラークフィールドは地獄と化した。
飛行してた友軍戦闘機はすべて撃墜され、残された反撃能力は対空砲のみ。
高度六千メートル以上の高空を飛ぶ爆撃機に対空砲が当たる訳も無く、
日本軍は悠々と反復攻撃を繰り返した。
やがて爆弾が尽きると、日本軍は去り・・。
残されたのは多くの残骸と瓦礫のみ・・。

「閣下。我々は負けたのです。
ここは捨てて後退するべきです。」

「負けた・・のか。
私は・・・。」

「負けました。これでは復旧も不可能です。
残された兵士と共に攻撃を受けていない基地に移動し、
反撃体制を整える方が相手に対抗出来る最良の手段です。」

呆けたマッカーサーを副官は諌め、彼を叱咤し生き残ったパイロットや兵士ほ引き連れ、
マニラを去るのだった。

その頃の台南基地。

「いやー、今日の攻撃は楽だったな。
演習でもこうはいかないぞ。」

「坂井隊長、敵の反撃はやはり一撃離脱ばかりですね。
もっとも交わすのは楽ですが。」

「油断はするなよ。
笹井。
西澤を見習え。
戦闘は見張りで決まる。
そして・・おい、菅野。
お前は猪みたいに敵に向かうが、アレでは味方が危険に陥る。
絶対にお前は編隊から離れるな。お前はオレの小隊のカモ番機に命じる。
西澤の尻をキチンと守れ。
もし西澤がカスリ傷でも負ったら・・。
お前を命令違反で整備兵に降格する。
分ったな。」

怒られた菅野直二飛曹は雷の直撃を受けたみたいに直立不動の姿勢を取り、
冷や汗を流してた。
まさか隊長に編隊を離れたのを気づかれてたとは・・。

「菅野、お前はオレが全編隊を見れないとでも思ってたのか？
舐めるな。
自分の率いる全編隊位掌握出来なくて、隊長が務まる訳が無かろう。
そしてこれは全隊員に教えておく。
隊長、そして編隊指揮官クラスとなれば、無線を用いなくとも配下の部下の心くらいは
簡単に把握出来る。それこそ指の動きまでな。
弱は自惚れぬな。
敵が弱いのでは無い。
単に現時点で我々が強いだけの事だ。
明日は敵が強いかも知れぬ。
常に敵は我々よりも強いと意識しておけ。
舐めたら・・。
次は地獄で敵と遭う事になるぞ。
分ったな？」

「「「「了解しました。」」」」

全隊員が坂井少佐に返答すると、坂井は敬礼し、会議室を後にした。
残された部下達は隊長の訓示を脳内で反芻し反省を繰り返してた。
特に菅野、笹井の両名は、ガックリとしてたのだ。
彼等は本日、一機の敵をそれぞれ撃墜出来て大喜びしてたのだが・・。

「菅野、隊長は怖いな。

オレは敵機よりも隊長の目が怖いよ。」

「笹井先輩、隊長は叩き上げの大先輩ですからね。
我々弱の心理などお見通しなんでしょう。
それにしても・・。
下手すると自分は整備兵ですか・・。
弱った・・。」

「心配するな。貴様も栄えある我が日本帝國戦闘隊の一員だ。
簡単には降格はせぬ・・と思う。
戦闘も大切だが、まずは列機としての勤めを果たす事だぞ。」

「・・・分りました。笹井先輩。
頑張ります。」

「坂井少佐、菅野に厳し過ぎるのではありませんか?」

「西澤、ヤツは才能はある。
腕も数年経てばオレ以上の腕になるだろう。
だが慢心して撃墜されたら・・。
それで終わりなんだ。
見込みがあるから叩くのだよ。甘えさせてたら次の出撃でヤツは帰って来れなくなる。
まずは死なせぬための術を仕込むのだ。西澤、ヤツは任せるぞ。
俺たちの次の世代の指揮官だからな。」

「分りました。隊長。」

初陣となった比島空襲でクラークフィールドは壊滅した。

そして度重なる空襲で在比米軍勢力は続々と削減され、撤退を余儀なくされていた。
布哇真珠湾の海軍総司令部は比島からのＳＯＳを受け、救援部隊を差し向けて来た。
帝國が願ってた展開が間もなく比島からサイパン島にかけて起きる。
勝つのはアメリカか、日本か・・。

開戦（後書き）

まずは開戦当初の空襲シーンです。
次回は史上初の空母決戦となります。
Ｂ１７程度に一式重爆の能力は改正しました。
さすがにＢ２９まではムリですね。

緒源表（前書き）

架空武器の緒源を書きました。

緒源表

リクエストもありましたし、今後の話の要にもなりますので、G世界の武器緒源を書いておきます。

戦闘機

ゼロ戦＜正式名、ゼロ式艦上戦闘機
エンジン　金星一型　出力　１５００ｐｓ
輸出仕様は金星二型　出力　１１００馬力
全長　９．１２１ｍ　全幅　１１．０ｍ　全備重量　３，１５０ｋｇ
最大速力　５７２．３ｋｍ／ｈ（高度６，０００ｍ）
輸出仕様は５１０ｋｍ
武装　１２．７ミリ機銃四門搭載。
Gデータに拠るブローニングのパクリであります。
輸出仕様は７．７ミリ二門のみ。
国内仕様はＦ４Ｆ同様に翼を折りたためる構造。
輸出仕様は折り畳み不能。
航続距離　全速３０分＋８５０ｋｍ（正規）

国内のゼロ戦はすべて空母に搭載。
烈風配備までの主力戦闘機として活躍。
烈風配備後は護衛空母に搭載され、終戦まで活躍。
史実のゼロ戦とは違い、急降下に制限は無く、バランスの取れた戦闘機として好評を得る。
ただしアメリカのみには最グレードダウンした仕様を輸出。
ガラクタ戦闘機として認識される。
輸出先、イギリス、ドイツ。この二カ国のみは国内仕様と同じモノ

を輸出。
フランス、イタリア、東南アジア諸国。グレードダウン仕様。
開発、１９３３年。
ゼロ戦の出現以後、日本の戦闘機は世界のトップを終戦まで走り続ける事になる。

烈風

戦時中の主力戦闘機並びに攻撃機として活躍。
余裕のある出力の発動機を得る事で、艦上爆撃はもちろん攻撃機の役割も兼用。
胴体下部に一トン爆弾まで搭載出来るベイロードを持ち、艦載機として万能を誇る。

全長　１１．０４０ｍ　全幅　１４．０ｍ
重量　４，７１９ｋｇ
搭載機銃　マウザー２０ｍｍ機関銃四門装備。
各２５０発搭載。
エンジン　火星一型（Ｐ＆ａｍｐ；Ｗダブルワスプを Ｇデータに拠るパクり、タービン搭載。）
出力　２０００メートルで２５００馬力　１００００メートルで１８００馬力。
馬力に余裕があるため、いかな任務も達成出来る日本版スカイレーダーとして、
戦後も長期間使われる万能機となる。
最高速度二千メートルにて６５０ｋｍ。
一万メートルにて５９０ｋｍを誇る。
翼はゼロ戦同様、付け根から折り畳め、デカイ機体の割には搭載機数は増加してる。
航続距離は落下タンク無しで全力３０分＋１，９６０ｋｍ。

増加タンク装備でさらにプラス千キロは可。
雷撃仕様と夜間戦闘機仕様では複座仕様となる。
急降下爆撃仕様はダイブブレーキ装備。
いずれの機体も基本は同一のため、戦場での互換修理も出来、現場からは好評を得る。

一式重爆攻撃機
本来、双発で開発予定だった一式陸上攻撃機を四発で開発。
Ｂ１７と同格の被弾能力を誇る日本版空の要塞。
最高速力　高度六千メートルにて４８０ｋｍ。
航続距離五トン分の爆弾搭載で５０００ｋｍ。
全長：２２．９３　ｍ、全幅：３２．５４　ｍ、全高：７．２０ｍ。
重量　全備装備で３５トン。
発動機　火星一型２５００ｐｓＸ４。
開戦初期から中期にかけての日本軍主力爆撃機として世界に恐れられる。
装備機銃は１２．７ミリブローニングＭ２モドキ。
Ｇデータに拠るパクリである。

その他実歴史と違う艦船。

戦艦長門、陸奥。
世界のビッグセブンとして知られるが、開戦初期のアメリカ奇襲攻撃でマリアナ沖にて、
撃沈されたと言う事に公式資料ではなってる。
実際には機関交換、その他大改造を施し、機動部隊に追従出来る機動性と
防空能力を配備。
機動部隊の守り刀として実力を発揮する防空戦艦薩摩、札幌として

生まれ変わる。
最大速力３０ノット。
長４０センチ砲六門搭載。その他ハリネズミの如く防空機銃搭載。

空母。
実史の空母が誕生してるがすべてアングルドデッキ、カタパルト搭載。
サイドエレベーター式となってる。
整備甲板には各層に降下出来るエレベーターもある。
整備甲板は開放式。寒い天候の場合や夜間はシャッターで閉じる事も可能。
基本的に開放式で整備。

戦艦大和、武蔵。
改造長門同様に防空戦艦として、機動部隊に追従可能な３０ノットの速力を誇る。
武装は長４０センチ砲九門搭載。＜史実の４６センチ砲よりも強力な破壊力を持つ。
多くの機銃搭載にて、防空の要となる。

オマケ・・。

陸軍、基本的に国内の防衛のみに徹する。
日本帝國は防衛が中心で敵地に攻め込み占領する場合は海兵隊が任務を負う。
陸軍は国内の災害や地元奉仕が任務の中心。
若者は海軍に集中してるので、陸軍は年寄りの集まる軍隊となる。

緒源表（後書き）

陸軍の話はオマケです。
国内の雇用調整にもなるので、仕事の無い浮浪者とかも陸軍に雇用されてますが、
優秀な若者は工場か海軍中心です。
赤紙はありません。

第一次マリアナ沖海戦（前書き）

史上初の空母同士の決戦が始まります。

第一次マリアナ沖海戦

卑劣なジャップの攻撃に拠りマッカーサー率いる在比米軍航空隊、並びに海軍基地は壊滅した。
マッカーサーは夜半にグアムに脱出。
残された兵士はコレヒドール要塞に立て篭もるも、雲行きは怪しい。
海軍機動部隊は急遽、パールハーバーを出撃。
フィリピンの同胞救援に向かってた。

「クソー。ジャップめ。
我が同胞になんて事をしやがる。絶対に壊滅させてやるぞ。」

アメリカ太平洋艦隊総司令長官：ハズバンド・キンメル大将は率いる事の出来る
すべての艦艇を率い、フィリピンに急行してた。
輸送船団は率いて居ない。
兵士救援をする場合は艦船に収容する予定だからだ。
まずは敵の日本軍との対決が最優先である。
愚鈍な輸送船を連れて来たら戦えないと判断したのだ。

「まずは敵を叩かないとな。ハルゼーの空母が帰ってて助かったぞ。」

そう・・。
お陸奥撃沈の立役者、ハルゼー率いる米機動部隊は長門撃沈後、速やかに真珠湾に帰還してたのだ。
おかげで今回の太平洋艦隊総出撃に間に合わせる事が出来たのだ。

「これだけの艦隊なら、、汚いジャップも潰せるだろう。

既にヤツ等のビッグガン、長門と陸奥は撃沈したしな。」

彼等は陸奥や長門が偽装戦艦だった事は戦後も知る事は無かった。
日本海軍最高の機密として、長門、陸奥は公式にも撃沈された事になっていたのだ。

「絶対に残るジャップの戦艦も叩き潰し、太平洋からイエローモンキーを叩き出してやるぞ。
総員、戦闘配置！！」

キンメルは近づいてるであろう、日本艦隊を警戒すべく第一種戦闘配置に兵員を付けた。

その頃の日本側。

「いいか。我々の使命は勝つ事では無い。
敵に打撃を与え続ける事だ。
ただし空の戦いだけは完璧に勝て。負ける心配は無いとは思うが、油断はするな。」

第一機動部隊総司令、山口多門の訓示が無電を通じ、全艦艇に流されてた。
無線封止はしていない。
敵に気づかれる事も任務の一つだからだ。

「ヨシ、戦闘機部隊はただちに警戒発進。いいか。
長門と陸奥の仇だけは取るぞ。」

「「「「了解しました。」」」」

全艦艇の乗組員は総員敬礼を行い、パイロットは各自の機に搭乗。
発進合図を待ってた。
艦艇乗員は持ち場に着き、戦闘開始命令を待ってた。
間もなく怒涛の如くアメリカ機動部隊の戦闘機が押し寄せて来るだろう。
戦いに絶対はない。
今は笑ってる彼等は数刻後にはモノを言わぬ躯となってる可能性も高いのである。

遠く離れた日本の霞ヶ関、海軍総司令部では・・。

「高野長官、待つ身は辛いですね。」

「仕方なかろう。我々は準備するまでが仕事なのだ。
そして彼等が帰る家を守り固めるのもな。
彼等を信じよう。」

「そうですね。
既に命令は下したのです。敵の戦力を削減させよ。
危機を感じたら撤退も可と・・。」

そう・・。
今回の作戦では勝つ必要は無いと判断してたのである。
もっとも負ける事は考えていないが、敵の出血のみを求めるのが今回の作戦のプランでもある。
それに勝ってしまうとコレヒドールの引き篭もり兵士を日本で面倒を見なくてはいけなくなる。
それだけは絶対に避けたい。
なので空母のみを片付けたら撤退する様に指示してたのだ。

後に第一次マリアナ沖海戦と呼ばれる戦いの封は間もなく切られる・・。

第一次マリアナ沖海戦（後書き）

コレヒドール兵士を引き取って頂くために今回の作戦では勝つ事はしません。
適当に・・・・・・します。

第一次マリアナ沖海戦　その壱（前書き）

いよいよ史上初の空母決戦です。
日本側にも犠牲??が・・。

第一次マリアナ沖海戦　その壱

フィリピンの友軍は負けたがオレ達海軍航空隊は負けないぞ。
糞ったれジャップの紙飛行機など、オレ様達のワイルドキャットなら一蹴だ。

堂々たる戦爆連合の大編隊が敵、日本海軍機動部隊に向かってた。
偵察機の情報では戦艦５隻、空母５隻、その他巡洋艦、駆逐艦を含む大機動部隊らしい。
まずは邪魔な戦艦を潰すべきだな・・。

ワスプ爆撃隊指揮官、ウオルドロン少佐は潰すべくジャップの艦艇を見繕ってた。

「諸君、間もなく憎きジャップの艦隊上空だ。
まずは邪魔な戦艦と戦闘機を片付けよう。
ナガトやムツを撃沈した我々だ。よもや心配はあるまい。」

「了解です。各爆撃隊指揮官は与えられた座標の戦艦を撃沈せよ。」

総計２００機以上の大編隊が間もなく日本海軍艦艇上空に到達しようとしてた。

空母赤城、加賀、その他の三隻の甲板上では全烈風が戦闘機仕様で待機してた。
まずは邪魔な戦闘機を壊滅させるべき。
今回も「エサ」は準備してあった。
戦艦やましろ、はるな、きりしまの三隻が人身御供となるのだ。

今回も中身は明治時代から使われたスクラップ戦艦。
ハリボテで山城、その他に似せて作られていた。
防空の穴もこれ等の戦艦モドキ上空はガラ空きとなってたのだ。

「いいか、空母には一機も近づけるな。あ、例のアレは庇わなくても良いからな。
間違ってもアレを攻撃してる爆撃機は撃墜するな。
まあ数機程度は生かして帰してやろう。
戦闘機は壊滅させろ。いいか。」

各パイロットは母艦司令塔から送られて来る無線を傍受、命令を受諾してた。

「敵攻撃部隊接近中、パラオ島北方より約二百機。
待機戦闘機部隊は直ちに迎撃せよ。
ただし最初は戦闘機のみ迎撃。空母に向かう爆撃機は撃墜してヨシ。」

命令が下り、甲板で待機してた烈風戦闘機部隊はカタパルトに移動。
続々と発進し、数分の間にすべての戦闘機は上空に飛び上がってた。

「カタパルトの威力は素晴らしいですね、長官。」

「ウム。Gクンの話を始めて聞いた時は、ナニを世迷言をと思ったが。
あの時の言葉を自分は恥じている。
戦闘機がまさか攻撃機の役割を果たせる時代が来るとはな。
おかげで犠牲の心配もしなくてよくなった。」

「その通りです。

ま、今回は迎撃戦ですから、彼等の訓練の成果を見せて貰いましょう。
それにしてもアメさん・・。敵ながら哀れですね。」

「言うな。一応今回も公式には戦死者が出るのだ。
我々は引き分けて逃げた軍隊となるのだ。」

「分っております。」

既に大本営の新聞発表のゲラも出来上がってたのだ。
後は実際の被害と戦果を入れるだけの・・。

艦隊上空では、武藤金義大尉が指揮を取ってた。

「いいか。各機。アレに近づく爆撃機は見逃しても良いが、それ以外は殲滅せよ。
それと・・。
弱の連中は絶対に指揮官から離れるな。
離れた弱は作戦完了後も外出止めにするぞ。」

どの編隊にも必ず初心者の弱が一人は居た。
未来の熟練者として育てるために。
だが一応の特殊飛行が可能となったばかりの弱はすぐに単独戦闘に入りたがる。
ベテランから見たら、カモでしか無いのだが。彼等はそれに気づけず。
食われてしまうのだ。
そんな彼等を諌めるのに一番効果が出るのは、命令違反をしたら外出止め。
ヤローばかりの軍人生活を送ってる彼等の最大の楽しみが作戦終了

後の休暇や外出である。
それが無くなるのだ。
彼等も必死で先任に付いて飛ぶだろう。

高高度には岩本徹三少佐の部隊が待機してた。
彼の烈風の後部には桜の花が何十も描いてある。
すべて空鮫部隊で撃墜した戦果である。

「隊長の烈風はカッコイイなぁぁ。
何時かオレもあんな桜を自分の機に書いて見たい。
だが当分は・・ムリか。
オレは弱だ。まずは落とされない事から覚えておかないと・・。」

杉田庄一三飛曹は隊長機を眺めながらボンヤリと呟いてた。

「スギ、ボケっとするな。もうすぐ敵戦闘隊が進入して来るぞ。
見逃したら・・バッター食わせるからな・・。」

杉田は隊長機から入った無線でビックリしてしまった。
まさか感づかれたのか・・。
ともかく返電はしておかないと。

「申し訳ありません。こちら杉田三番。」

「おぅ、良い返事だ。オレのケツから離れるなよ。敵が侵入して来たら、
降下攻撃に入る。
オレが撃つ時は撃て。
そしたらオレの戦果の半分はお前のモノだ。
二機落としたら桜を一つ入れられるぞ。」

何と隊長は自分が桜の撃墜マークを欲しがってた事をご存知だったらしい。
頑張って隊長の指示に従おう。

やがて敵味方合わせて五百機からなる大空中戦の花がマリアナ上空に咲きだした。
阿鼻叫喚の絶叫と爆煙、曳航弾の軌跡が飛び交う死の花が・・。

第一次マリアナ沖海戦　その壱（後書き）

次回は悲惨？な事になるやましろ、きりしま、はるなです。

第一次マリアナ沖海戦　その弐（前書き）

いよいよ決戦の始まりです。

第一次マリアナ沖海戦　その弐

ヨッシャ、ジャップの連中はどうやら今回もマヌケらしい。
見ろ、ハルナやヤマシロ、キリシマの上空がガラ空きだ。
戦闘機部隊はガッチリと周囲を固めてくれてる・・。
コレなら・・。

マックラスキー大尉は日本軍戦艦上空がガラ空きなのを確認すると、
ただちに配下の列機に攻撃命令を下した。
ＳＢＤドーントレスが悲鳴を上げ、キリシマに突撃して行く。
雷撃機が魚雷を戦艦めがけて発射する。
面白い様に敵に命中する。
我が軍の技術は素晴らしい。
やがてすべての攻撃が終わると思った頃・・。
突然、我々の攻撃機が・・・。
壊されてしまったのだ。
どうして帰してくれないのだ。
オレ達はもう仕事は終わったのだ。
帰して・・・クレ・・。
オレの意識はそこで永久に消えた・・・。

「こちら岩本一番、敵の仕事は終わった模様。
これより始末にかかる。
全機、まずは戦闘機を始末しろ。
各部隊のサブ小隊は攻撃機を処理しろ。
かかれ！！」

後に米軍からチェリーマーダーと呼ばれる事になる岩本の太平洋戦

線初の攻撃命令だった。

ジョニー少尉は今日が初陣だった。

「いいなぁぁ。オレも攻撃機に乗れば良かったよ。
彼等は戦艦を撃沈できて本当に羨ましい。」

ジョニーは攻撃機が思う存分暴れているのを心底羨ましく思ってた・・が。

突然、攻撃機の一機が炎を吹き上げ爆発してしまった。

「ど、どうしたのだ。今まで対空砲もまばらだったのに。」

「ジョニー、逃げろ。敵機がぁぁ。」

上を見ると見た事の無い巨大な航空機が我々に襲いかかって来てた。
あんな巨大な飛行機なんて鈍重に決まってるだろ?

ジョニーはワイルドキャットの翼を翻すと、敵機に相対して行った。
すると・・敵機から巨大な砲撃を受け、オレの愛機の翼が砕けてしまったのだ。
人事みたいに考えてるが、あまりに一瞬の事で現実に思えなかったのだ。

「わ、ヤバイ。
脱出しないと、火が出て来た。
熱い、誰か助けてくれ。オレノテガヤケテシマッテル。

ママ、パパ。タスケテクレ・・・。」

ジョニー少尉の乗るＦ４Ｆは炎と共に太平洋の藻屑と消えて行った。

「スギ、良くやった。一機撃墜だな。
帰ったらオレが桜を書いてやる。」

「ありがとうございます。隊長。」

「戦闘はこれからだぞ。オレの援護を忘れるなよ。」

「モチロンです。お任せください。隊長。」

「ヨシ。次の戦闘機を始末するぞ。」

岩本の命令に従い、多くの烈風が再び上空に舞い上がって行く。

武藤は悠々と空を舞い続けていた。
あたかも遊覧飛行の如く。
だが彼の目は鷲を思わせる獰猛な目で敵を探してたのだ。
やがて五機のグラマンが彼の視界に入って来る。
武藤は列機に待機してろと命令し、数機が鎌首を持ち上げて武藤に襲いかかろうとした瞬間。
一瞬の連射でグラマンは火達磨となって墜落して行った。
だが日本を舐めてた彼等はまぐれと思い、再び武藤に襲いかかろうとしたが。
やはり一瞬の急降下と一撃の射撃でグラマンは翼を砕かれ波間に消えて逝く。
驚いた彼等は迎撃を諦め退却しようとしたが、逃げ腰の敵を見逃す程、武藤は甘く無い。

列機に回り込ませ逃げ場を防ぎ、やがてすべてのグラマンは壊滅して消えてしまってた。

はるな、きりしま、やましろが波間に消えようとしてた頃、まだ残弾のある攻撃機が見慣れぬ戦艦を見つけ、攻撃に移ろうとしてた。

「ウオルドロン少佐、まだ戦艦が残ってましたよ。アレも殺ってしまいましょう。」

「ああ、アレもカモだろう。あと何機残弾が残っているか？」

「二十機は残っております。」

「それだけあれば撃沈は可能だろう。私は上空から指揮を取る。気をつけてかかれ。」

「了解しました。」

私の可愛い部下達は絶頂だった。
この瞬間までは・・。
だが見慣れぬ戦艦は、今まで見た事も無い対空砲火を放ち始めたのだ。
私達の部下が・・、次々と殺られて往ったのはそれからすぐだった。
何だ？
我が軍の戦艦でもあんな対空砲は撃てないぞ。
まるで火の船だ。
ああ、また部下が・・。

それからは一方的な狩りの時間だったらしい。

私は雲の中に逃げ込み生きて帰れたが、部下の大半は戦艦三隻の撃沈を土産に。
神に召されてしまったのだ。
私が命からがらマザーの元に帰ると・・。
我がマザー。
レディレックスは業火の中に居た。
上空には例の戦闘機が飛行してた。
何故戦闘機・・のみが？

その疑問はすぐに解けた。
彼等は爆撃機でもあり、雷撃機でもあったのだ。
攻撃が完了すると次は機銃の雨を我が軍の甲板要員に降らせ、無慈悲な攻撃を繰り返してた。
私の愛機にはもう燃料が残されていない。
だがマザーは沈没寸前だ。
仕方ない、デストロイヤーに拾って貰うか・・。
私はスロットルを絞り愛機と最後のランディングを楽しむ事にした。
やがて愛機は波間に着水。
幸いにもコパイの連中に怪我は無かったらしい。
ハルゼー長官も同じデストロイヤーに乗艦してたので、攻撃成果を報告した。
母艦は全滅したが、アチラも戦艦を三隻も撃沈されたのだ。
ほぼ相打ちと言っても良いだろう。
多くの部下は再び帰らぬ旅に出てしまったが、彼等も満足してるだろう。
三隻もの戦艦を撃沈したのだ。
やがて日本海軍は撤退して行ったらしい。
我々もコレヒドールの友軍を救出する任務がある。
幸いにも救出の間には日本軍の反撃は無かった。
キンメル長官は、相打ちにはなったが、作戦としては成功したのだ。

急いで母国に帰り、新しい母艦を調達せねば・・、と仰られてた。
我々は勝った・・のか??

「高野司令長官、何とか初期の目的は達成出来ましたね。
敵の母艦は壊滅。戦艦は見逃しましたが。」

「今はコレで良い。
ヤツ等も戦艦が残ってる事で、色んな作戦を考えるだろう。
我々は防衛を固め、敵のパイロットを壊滅させるのが最大の目的だ。
それと・・。」

「潜水艦狩りですね。」

「ウム。潜水艦だけは恐ろしいからな。
絶対に防衛圏内に敵の潜水艦を侵入させるな。」

「東海に頑張って貰いますよ・・。」

第一次マリアナ沖海戦はこうして終了した。
日本軍の損害。
戦艦はるな、きりしま、やましろの三隻。
航空機損失。
攻撃時に烈風攻撃機タイプ十五機喪失。
戦闘機タイプは全機帰着。
人員損害１５名。

戦果、
アメリカ正規空母、ヨークタウン、レキシントン、ホーネット撃沈。

撃墜グラマンＦ４Ｆ　６０機、ダグラスＳＢＤドーントレス８０機、
ダグラスＴＢＤデバーステーダー・・。
全機壊滅。損害五十機。

人員損害　パイロット１９０名、搭乗員１８０名。
母艦乗員約６０００名。

大国アメリカでもパイロットの損害は軽くは無かったが、それに気づくのは
ベテランが底を尽く頃だったのだ。

第一次マリアナ沖海戦　その弐（後書き）

第一次マリアナ沖海戦終了です。
日本の目的は勝つ事ではありません。
負けない事なのです。
そのためには卑劣と思われても、敵の嫌がる行動を取り続けます。

帰国（前書き）

アメリカ側の帰国模様です。

帰国

我々は勝ったのだ・・・ろうか・・・。
多くのパイロットを喪い貴重な母艦を喪失したが、敵の大戦艦をまたも三隻も撃沈。
ジャップの新聞を見たが、戦艦ヤマシロ、ハルナ、キリシマの三隻だったらしい。
我々が撃沈した戦艦は。
おかげで太平洋から大半のジャップのビッグガンが消え失せた・・ハズだ。
だが私は気が晴れない。
あの巨大な戦闘機の幻影が消えないのだ。
アレは凄まじい破壊力を持ってた。
戦闘機なのに、魚雷は投下出来る。急降下爆撃は出来る。
そしてあの運動性だ。
我々のワイルドキャットよりも身軽に動けるのだ。
アレだけの巨体で。
一日も早くアレ以上の戦闘機を開発しないと、また我々の空母は塩水の中に叩き込まれてしまう。

「大統領、何とか勝ちましたね。
おめでとうございます。」

「ハル。めでたいと言えるか？
確かに戦艦を5隻も撃沈したのは偉大な戦果だが、フィリピンは落とされる。
空母は壊滅すると、どうも我々の負けみたいだ。
生き残りのパイロットの証言を読んだか？」

「いいえ、まだ私の手元には届いておりませんので。」

「ここにある。
読んで見たまえ。」

ハルは大統領から書類を渡され、黙って黙読を始めた。
数刻の後・・・。

「大統領、深刻な事態ですね。
この巨大な戦闘機とは我々の未知な戦闘機でしょう。」

「その通りだ。戦闘機のみならず、爆撃も雷撃もこなせるとは。
我々の持つ戦闘機では絶対に出来ない芸当だぞ。」

「相当に強力な発動機を搭載してるのでしょう。
航空機開発局に問い合わせて見ます。」

「急げ。もう戦争は始めてしまったのだ。
私は艦政本部に空母の増産を叱咤して来る。」

ルーズベルトは空母の増産を急がせ、ハルは航空機開発局に強力な
馬力の戦闘機開発を
叱咤した。
彼等の話では、戦闘機でも爆撃は可能だが、雷撃は難しいと言う。
超低空で安定しないと言う事らしい。
だが日本の戦闘機はその芸当をこなしているのだ。
出来ないとは言わせない。
アメリカ側も新鋭戦闘機の謎を何とかしたいと考えたが、敵の出没
地域はすべて海上なのが、
不味かった。

例え撃墜出来てもすべて海没してしまうのだ。
破片も入手出来ない。
コチラの作戦区域には日本軍は絶対に侵入して来ず、敵地に侵入すると袋叩きにされてしまう。
日本側はこの戦争を国防戦争と名付け、フィリピンのみは開放したが、その他の地域には
一切手出ししないと世界に宣言してしまってた。
世界の目は我が国に厳しくなってる。

「大統領、どうも世界の目が我々に厳しいみたいですね。」

「当たり前だ。不意打ちで敵の戦艦を撃沈したのが世界に知られてしまったのだ。
だがもう時計の針は元には帰らぬ。
開始した戦いは勝利するまでは止められないのだ。」

「その通りです。
日本の諺にこの様な諺があります。
勝てば官軍。
何でもメイジイシンで幕府が新政府に敗北した時に出来た諺らしいです。」

「そうか・・。
では我々がカングンとなれば良いのだ。
いい話を聞かせてくれたな。」

「いえ、私は偉大な大統領を補佐するのが仕事です。
さて、我々もパイロットの育成と軍備増産に励みますか。」

だがパイロットの増産はどうも厳しいらしい。
熟練パイロットが壊滅してしまったのだ。
先日の戦いで。
僅かに残ったパイロットも戦闘機乗りは殆ど居らず、爆撃機パイロットも数人。
大半の熟練パイロットが戦死してしまってたとは・・。
海軍航空隊のシステムも考え直す時期だな・・。

「キンメル長官、ハルゼーです。」

「ハルゼーか？入りたまえ。」

「大統領から母艦パイロットの養成叱咤の手紙が来ております。」

「知っておるよ。だがどうやって増産するのだ？
先の戦いで我々のプロパイロットはほぼ全滅した。
戦艦は大量に残っているが、空母は皆無。
敵陣に攻め込むには母艦が必須なのに一隻も無い。
正直、作戦を考える事も放棄したい気分だよ。」

「長官、申し訳ございません。
私が母艦を守れなかったばかりに・・。」

「ハルゼー、あの戦闘機には我々は無力だったよ。
まさか戦闘機が魚雷も爆弾も発射出来るとは。
想像も出来なかった。フィリピンの同胞を救出出来たのが奇跡と思う程だ。」

「そう・・ですね。長官・・。」

「ハルゼー、泣いているのか？」

「いえ、泣いてなどいられません。
泣くのは勝利した時だけです。」

「そうだな。我々は勝たなければならぬ。
大統領の話では、バイロットの育成の叱咤。
空母の増産を急がせているそうだ。」

「今、稼動の空母は・・。」

「エンタープライズ、ワスプ、サラトガ、レンジャーの四隻のみ。
大西洋もひっくるめてだぞ。アッチも空にする訳にも行かない。
それ以外は護衛空母だけだ。」

「この四隻は絶対に守らないといけませんね。」

「ウム。防空陣形の研究を急がせろ。」

「敵は戦艦こそ喪いましたが、空母は全て健在。
ジャップの言葉を信じるならコチラの勢力圏内に攻め込む事は無いでしょうが、
コチラから攻め込む事も今は出来ません。」

「だから空母が必要なのだよ。時間は無い。
とにかく出来る事から片付けてしまおう。」

アメリカは名目上は勝利してるにも関わらず、敗北気分が蔓延して

たのだ。
そして戦闘機開発の叱咤。
パイロット育成の叱咤と叩きまくってた。
だが彼等はまだ知らぬ。
空母パイロットがいかに貴重な宝石同様の価値を持ってたと言う事を。
大国アメリカと言えども、空母パイロットは育成が厳しいのだった。

帰国（後書き）

アメリカ側の内情です。
母艦パイロットは本当に育成が厳しいと思います。
陸軍のパイロットなら飛んで戦って着陸出来たらＯＫですが、
母艦パイロットは着艦と言う仕事、発艦と言う仕事。
そして海の上を飛ぶと言う仕事があります。
海を飛ぶと言うのは予想以上に難しい仕事です。
これに気づくのは末期の頃ですが。
空母の残存数を勘違いしておりました。
訂正しておきます。

天皇陛下（前書き）

機動部隊が帰国し、天皇陛下に事実のみを報告します。

天皇陛下

主人公なのに影が薄いGです。
いいのですよ。コレで。
我々に光が当たるのは好ましくありません。
我々は縁の下の力持ちで良いのです。

さて、山口機動部隊が帰国しました。
本当に演習通りの結果を持ち帰ってくれ、さすが山口さんと感嘆しています。

「多聞丸、ご苦労だったな。
被害も少なく、見た目での戦果は派手では無い。
まさに我々の求めてた戦果通りだ。」

「いえ、高野司令長官の命令が適切だったからです。
そして我々現場の人間のやり易い命令も下して頂けました。
もし、「殲滅せよ。」とかの命令が入ってたら、被害は数倍は大きくなってたと思います。」

「山口長官、我々は負けない事が最大の目標です。
そのためには途中の戦果は程々で良いのですよ。
とにかく敵に浅くも深い出血を負わせる事が、最終的には講和にと繋がるのです。」

「Gクン、君の言うとおりだな。
アメリカは強大な国だ。一つの国で複数の国と戦える国力を持つ国だ。
アメリカに勝つのは今の日本でも難しい。

例え技術や兵器で勝ってても、数の力で押されたらいずれは敗北するだろう。
だが我々の目的は平和的講和だ。
勝利する事では無い。」

「その通りだ。多聞。
いかな強大な国力を持つアメリカでも海軍パイロットだけは簡単には量産出来ぬ。
いいか。
絶対に敵陣に引き込まれるな。
コチラの懐に敵を呼び込み、少しづつで良い。
敵のパイロットを殺るのだ。」

「艦載機のパイロットは一年やそこ等では量産出来ませんからね。
国土の防衛線も日本の国力に合わせた広さです。
これなら勝てはしませんが、負ける事は無いと思います。
兵器も現時点では世界の最高峰なのがありがたいですし。」

烈風は日本軍のスカイレーダーとして長く使われる名機となってたし、
後継機のジェット戦闘爆撃機も既にスタンバイしてた。
烈風が劣勢になるまでは前線には出さないが。

「多聞、次はお前では無く、小沢に任せるぞ。」

「ハッ、次は戦艦の出番ですね。」

「ウム。日本戦艦に敵艦が壊滅されれば敵は戦艦の増産に励むだろう。
そしてまた航空機に拠る作戦。

敵に狙いを定めさせるな。迷わせろ。」

「了解しました。高野司令長官。」

そう・・。

次は戦艦同士の決戦と決めてたのだ。

陸奥、長門、霧島、榛名、山城。

そして武蔵、大和とすべて長４０センチ砲を搭載して生まれ変わらせてた。

砲身を伸ばし、装薬の威力を増し、弾を延長した新型砲はかつての大和の４６ｃｍ砲の

破壊力を上回ると予想されてた。

ほぼ直角にも上げられるため、高高度を飛ぶ航空機も迎撃出来る優れモノだった。

アメも驚くだろうな。

戦艦を５隻も始末したハズなのに、新型戦艦がゴロゴロ出て来るのだから・・。

所変わって、ここは皇居の天皇御前。

高野司令長官は陛下に戦果の報告に来てたのだ。

かつての大本営とは違い、事実のみを陛下に入れる事に拠り、陛下の心境は

完璧に海軍寄りとなってた。

「陛下、以上が我が機動部隊が潰した戦果です。

多くの敵兵を殺害した罪はすべて私にあります。

講和が決まりましたら、私を戦犯として処理してください。」

「高野、それは間違っておるぞ。
もし戦犯として高野が裁かれるなら、朕こそが戦犯として裁かれるべきだ。
高野は朕の代わりに戦ってくれてるだけの兵士、我が国の民だ。」

「陛下、有難き言葉ですが、誰かが始末をつけないとアメリカと言う国は黙らないでしょう。
陛下は日本に取ってかけがえの無い大切な方です。
どうか汚れ仕事は我々軍人にすべてお任せください。
陛下には今後も大切な仕事が待ってるのですから。」

「・・・高野、済まぬ。
この無力な朕を許してくれ・・。」

「とんでもございません。陛下。
我が国は陛下が居るからこそ纏まっているのです。
どうか陛下は憐として、帝國臣民を見守ってください。
我々は少しでも早く講和が出来る様に努力致します。」

「頼むぞ。高野。
今後も期待しておる。」

陛下への報告が終わると同時に国民への報道が認可された。

苦戦、敵、米国は強大なり。
我が国の戦艦、山城、榛名、霧島を喪失せり。
敵側の出血も膨大ではあるが、我々も負けてはいられぬ。
なをフィリピンは開放せり。
すべての在比米軍は駆逐。

比島国民は戦火が遠のき喜びの声が上がりつつあり。

そして戦死者のすべてが掲載される。
戦艦の喪失戦死者はすべて、本当は戦前に物故してた故人。
本当の戦死者は攻撃時に被爆、戦死したパイロットのみ。
敵国アメリカにもこの新聞は入手され、アメリカ側は誇大な戦果として国民に報告。
膨大な国債発行のネタとして・・。

天皇陛下（後書き）

段々Gと高野の狙いが見えて来たと思います。
次回の戦いは戦艦同士のバトルです。

戦艦出撃（前書き）

いよいよベールに包んでた戦艦部隊が出陣します。

戦艦出撃

撃沈扱いとしてた戦艦ですが、ヂツは沈んだのはニセモノでした♪
テへ♪

Gです。
山城も霧島も榛名も改造が終わりました。
新造した方が早かったかも知れませんが、日本は貧乏国家。
使えるモノは最後まで使うべきです。
ましてや戦艦は今回が最後の出番となるでしょう。
華やかに戦って、敵に大出血をしてもらいませう・・。

榛名、山城、霧島ではさすがに不味いので、それぞれ・・・。

高千穂、河内、桜島と微妙に関係のある名前に改名し、配備した。
ちなみに薩摩と札幌は先の第一次マリアナ沖海戦でデビューしてます。
そして・・。

「大和と武蔵は凄いな・・。」

「高野長官、彼等は今後は防空陣の壁となるのです。
これでも足りない位ですよ。」

大和と武蔵が同時に配備されたのだ。
高野さんも出陣したいと騒いだが、指揮官が前線に出て戦死でもしたら大事。
指揮官先頭は過去の事です。
指揮官や参謀は出撃までのお膳立てが仕事なのです。

栄光はすべて前線の兵士のモノですよ。
高野さん。

「そうだな。Gよ。
オレが間違ってた。彼等の帰る母港や国を守り、指導するのが我々の仕事だ。
戦果を上げて帰る彼等に名誉も与えぬとな。」

「その通りです。
史実のGは我れ先にと自分の栄光としてましたが、我々は違います。
戦果はすべて彼等の栄光とし、栄誉を与えるべきです。
特にエースと呼ばれる事になる歴戦搭乗員は新聞やニュース映画でどんどん取り上げるべきです。
それが後の海軍の底力にもなります。
優秀な若者もこぞって我々を支持してくれると思います。」

「その通りだ。
彼等の乗る航空機の防弾や脱出装置の開発は進んでいるか？
彼等も神では無い。不意を衝かれれば撃墜される事もあろう。
その際にコチラの不手際で彼等を愛機と共に喪う事だけは決してしてはならぬ。」

「大丈夫です。
既に簡易脱出装置も配備しました。
被弾して操縦困難となった場合は最初に風防を飛ばし、次に座席と共に彼等を脱出させる事が
可能となっています。」

「誤爆は無いだろうな？」

「出撃前に必ず点検を義務付けております。
点検は専任の整備士が受け持っていますので間違いはありません。」

「絶対にナアナアにはさせるな。
人間は慣れるとナアナアとなってしまう事が多々ある。
搭乗員の命の綱だ。
絶対にナアナアにはさせるな。」

「モチロンです。彼等は五重もの監視体制で見張っております。
手抜きしたら懲罰房行きです。」

「それなら良い。
先の開戦では数人はエースが出ただろう。
彼等を表彰してやらないとな。」

「次の作戦が終わったら落ち着くでしょう。
表彰すると共に内地での教育航空隊に配備して彼等も休ませてあげましょう。」

「任せたぞ。G。」

高野長官と色々と話してると、大和を含む大戦艦部隊が柱島を出撃して行く。
壮大な軍艦マーチと共に。

旗艦大和のブリッジでは小沢司令長官が高野司令の乗る駆逐艦に敬礼をしてた。
見えるとは思えぬが、それでも上司は敬うべき。
今回の作戦は戦艦同士でのガチでの殴り合いだ。
良くもこんな作戦に私を投入して下さった。

今回の作戦で散る事になろうとも、この小沢治三郎、地獄に落ちても後悔は無し。
まさに我が生涯の最高の出来事となろう。
だが負けるとも思えぬ。
鉄壁の防空陣を山口多聞中将が約束してくれる。
そしてこの大戦艦の群れだ。
艦隊決戦は恐らく今回が最後となろう。
その後の戦艦の仕事は、空母の壁だ。
国の壁だ。
壁となる前にこの戦いで少しでも彼等の誇りを上げておかないとな。
頑張れよ。大和、武蔵。そして改造した彼等よ・・。

「小沢長官、敵は出て来るでしょうか？」

「出て来るよ。今回は派手に無線も出し、グアム攻略に向かうと宣言してるのだ。
もちろんグアムなど要らないがな。」

「ごもっともです。敵地を占領しても作り直し兵士の捕虜を取る事が時間の無駄。」

「その通りだ。
捕虜を取っても彼等は戦後、絶対に騒ぐそうだ。
卑劣なジャップに屈辱の捕虜生活をさせられたとな。
それなら一人の捕虜も取らなければ良い。」

米軍兵士の彼等の未来は海底の魚のエサと漁礁となるのだが。
それは先の事で・・。

大和、武蔵は往く。

敵の戦艦を滅ぼすべく・・・。

戦艦出撃（後書き）

海戦はグアム沖の予定です。
ようやく戦艦を前面に出せます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9303y/

G海軍航空隊

2011年12月17日05時59分発行